

F8-01

研究報告書第1号

# 中・高校生の生きがいに関する調査

—「仲間性」「未来性」を中心に—

山形県立図書館



1-0310401-1

1975・4

山形県教育センター

K  
371

ヤ

昭和50年4月刊

## 中・高校生の生きがいに関する調査

－「仲間性」・「未来性」を中心に－

山形県教育センター

### 目 次

#### は じ め に

#### I 中・高校生の「仲間性」

1. 友だち関係
2. 仲間への理解と仲間からの承認

#### II 中・高校生の「未来性」

1. 将来に対する考え方
2. 目標に対する取り組み方

#### III 学校生活におけるはりあい

1. 生活の中のはりあい
2. 学校生活におけるはりあい

#### IV 「仲間性」・「未来性」と学校・家庭生活

#### ま と め

発行者 寄贈



64  
K371.47  
Y

## 概 要

### 1 ね ら い

未来をになう中・高校生がどんなことを考え、何に生きがいを求めているのかを明らかにする。

### 2 「生きがい」とは

「生きがい」の構成要素は「仲間性」（仲間とともにいることの心地よさ）と「未来性」（自分から未来を開発して行くことの喜び）の二因子とした。

### 3 対象と方法

調査対象人数は中学2年、高校1年、高校3年それぞれ約1,000名ずつである。対象校は中学校19校、高等学校16校で、中学生は規模別男女別、高校生は学科別男女別を母集団として選び、質問紙法で調査した。

### 4 結果の概要

#### (1) 「仲間性」

- ① 友だちについては半数前後の中・高校生が満足感を抱いており、友だちという時は8割前後が「楽しい安息所」だと感じている。とくに女子は友だちという限られた範囲の中では極めて開放的情緒的である。
- ② 農山村地区にある小規模校は、都市地区にある大規模校に比し、友だちの数に少数化の傾向があり、友だちから承認されていないと感じている生徒が多い。小規模校ではクラスの人数が少ないので、たがいに交流が深く、クラスの人意識や行動をよく理解していると予想したが、必ずしもそうではない。農山村の変ばうは中学生の「仲間性」や「未来性」に大きな影響を及ぼしているようである。

#### (2) 「未来性」

- ① 中・高校生の生き方をみると、「将来努力型」や「現実享楽型」が少なく、「努力はするが現在の生活も楽しみたい」という「折衷型」が大勢を占めている。学校における目標への取り組み方では「不努力型」の生徒がかなりおり、特に、高校1年及び普通科（進学）以外の学科が目立っている。男子は女子よりも比較的「努力型」が多く、自己実現の可能性を期待している。9割進学を迎えた今日、高校生にどのような目的意識をもたせるかが課題であろう。
- ② 中・高校生の理想は日常生活の中に埋没しているくらいがみられる。しかし、現在の単調な生活にあきたらず、「何かしたい、しかしそれが何であるかわからない」という「模索型」が半数以上おり、現代中・高校生のいらだちが感じられる。
- ③ 学校生活における三大「生きがい」は「友だちとの交流」「部活動」「好きな教科の学習」であり、特に、女子は「友だちとの交流」を強く求めている。

#### (3) 「仲間性」「未来性」と学校生活

「仲間性」「未来性」ともに学校生活と強い関連がみられる。学校生活の充実感は高校1年では「仲間性」と「極めて相関度が高く」高校3年は「未来性」と「相関度が高い」。

## は し が き

中・高校生期は発達上の転換期であり、現代は歴史上の転換期であるといわれている。つまり現代に生きる中・高校生は二重三重の変革の波にさらされているといつてよい。

ところで、人間が生きていくには「生きがい」が必要である。生きがいの対象は発達段階やその時の状況によって変化するが、生きがいを求める気持は万人共有である。とくに中・高校生は痛切に生きがいを求めており、それが容易に得られないために不安やいらだちに陥り、ともすると不適応症状を呈しがちになる。

われわれはこの変革期に生きる中・高校生がどんなことを考え、何に生きがいを求めているかを的確にとらえ、適切な指導を加えることが必要である。山形県教育研究所は47年度、社会認識の根底にある価値体系を探究し、48年度は満足感・不満感を中心に中・高校生の生活意識を追求した。

昨年度は前年度までのあとをうけて、「生きがい」に焦点をあて、本県の中・高校生が何に生きがいを求めているのかを明らかにしたものである。具体的には「仲間性」と「未来性」を中心にして、学校生活における中・高校生の生きがいの傾向を探るとともに、それらの関連を考究しようとしたものである。

この調査によって、本県中・高校生の生き方にかかわる問題点をいくつか明らかにすることができたと思うし、従来のべられてきた中・高校生の意識とは異った傾向も若干みられるようである。各学校において生徒理解の資料として御活用いただき、さらに一層ほりさげていただければこの上ない喜びである。

最後に、この調査をすすめるに当たって、関係機関や調査対象校からいただいた格別な御協力、御援助に対し深く感謝申しあげる次第である。

なお、この調査は昭和49年度に実施したものである。

昭和50年4月

山形県教育センター所長

蜂 屋 英 夫

## 目 次

|                              |    |
|------------------------------|----|
| は じ め に -----                | 1  |
| 1. 調査の意図とねらい -----           | 1  |
| 2. 調査の仮説 -----               | 1  |
| 3. 調査項目の構成 -----             | 1  |
| 4. 調査の方法と対象 -----            | 2  |
| I 中・高校生の「仲間性」-----           | 4  |
| 1. 友だち関係 -----               | 4  |
| 2. 仲間への理解と仲間からの承認 -----      | 7  |
| II 中・高校生の「未来性」-----          | 11 |
| 1. 将来に対する考え方 -----           | 11 |
| 2. 目標に対する取り組み方 -----         | 18 |
| III 学校生活におけるはりあい-----        | 23 |
| 1. 生活の中のはりあい -----           | 23 |
| 2. 学校生活におけるはりあい -----        | 25 |
| IV 「仲間性」・「未来性」と学校・家庭生活 ----- | 29 |
| ま と め -----                  | 35 |

## は じ め に

### 1 調査の意図とねらい

ここ10年間、「生きがい」についての論議が活発になされてきたが、青少年の意識に関する限りマイナスの評価が多かったように思う。確かに、価値の一元化時代に育ったおとなと、多様化する価値の中で生きる中・高校生に意識のズレやちがいがみられるのは当然である。しかし、それらをすべてマイナスに評価し、非難を浴びせるのは問題である。

現代の中・高校生は生きがいを喪失しているといわれているが、果してそうであろうか。むしろ、充実した生活を送るべく懸命に「生きがい」を模索していると考えた方が生産的であるように思われる。現代の大衆社会状況は多数の「問題の中・高校生」を生みだしているが、大多数の中・高校生はきびしい生活条件のもとで、自己を形成すべく努力を続けているのではなかろうか。

中・高校生期は社会に適応すべく、また、社会の中から理想を学びとっていく時期であるが、その対象となる社会が動揺し、変貌しているので、中・高校生はどこに焦点をおいたらよいのかかわからないというのが現状であろう。

そこで、この調査ではゆれ動く現代の中に生き、しかも、未来をになわねばならない中・高校生がどんなことを考え、何に生きがいを求めているかを明らかにし、中学校や高等学校における生徒指導のための基礎資料を提供するものである。

### 2 調査の仮説

- (1) 現代の中・高校生の生きがい感には共通した傾向がみられるのではないか。
- (2) 現代の中・高校生は「仲間性」（仲間とともにいることの心地よさ）を感じているが、「未来性」（自分から未来を開発して行くことの喜び）を見出せない生徒がかなりいるのではないか。
- (3) 中・高校生の生きがい感は学年・男女・規模（中学校）・学科（高校）によってちがいがみられるのではないか。
  - ・学年・中学生は日常生活の一こま一こまに充実感を抱いているが、高校生になると、それが焦点化されてくるのではないか。
  - ・男女・男子は「未来性」に、女子は「仲間性」に生きがいを見出している傾向があるのではないか。
  - ・規模・小規模校は地域の影響等もあって、友だちに少数化の傾向がみられるのではないか。
  - ・学科・普通科（進学）の生徒は比較的未來志向型が多いのではないか。
- (4) 「未来性」「仲間性」と、学校生活は強い関連がみられるのではないか。

### 3 調査項目の構成

「生きがい」とは何であるか。人によって生きがいの定義がまちまちなようである。とくに意識調

---

担当者 那 須 宗 一 郎  
大 塚 浩 介

---

査の対象として生きがいを考える時、それを規定するのが困難である。生きがいは一種の感情であり極めて主観的なものであるからである。しかし、生きがいの定義が多様で主観的なものであるとはいえ、それらに共通する性格もみられる。その共通する性格の中で、とくに中核となるのは、「仲間性」と「未来性」であると考えられる。

島崎敏樹氏は「生きがいと青年たち」という論文の中でつぎのように述べている。

「生きがいには二つある。その一つは、したくまじわる仲間と一緒にくらしていれば、それで生きがいがたっぷりあるということ。もう一つは、自分から明るい未来を目指して生きていけたら、そこに充実した生きがい得られるということ。」（中等教育資料1974年1月号）

この調査では、上記の論文を参考にして、「仲間性」と「未来性」の二因子が「生きがい」の構成要素と規定した。つぎに、学校生活に焦点を向け、中・高校生がどんな時に「生きがい」を感じているかを調査した。調査項目は下記の通りである。

#### (1) 「仲間性」

・友だちの数 ・友だちと一緒にいる時の気持 ・友だちとやっていること ・クラスや部員の意識や行動の理解度 ・クラス、部員、友だちからの承認度

#### (2) 「未来性」

・将来に対する見通し ・将来の生き方 ・期待する職業 ・大学進学への希望 ・目標に対する取り組み方 ・生活についての感じ

#### (3) 学校生活

・「はりあい」を感じる場 ・学校生活における充実感 ・共感を覚える生き方 ・授業・部活動・友だちとの交流のはりあい度

### 4 調査の方法と対象

#### (1) 調査の方法

9月上旬から10月上旬、質問紙法（主として選択技法、一部に記述法を加味）によって行った。調査の際は調査者が学校に出向き、設問を読みあげながら反応を得、その場で回収した。ただし、時間の関係で調査対象校の先生にお願いしたところもある。

#### (2) 調査対象

調査対象人数は中学2年1,027人、高校1年1,172人、高校3年1,157人である。対象校は中学校19校、高等学校16校で、規模別（中学校）・学科別（高校）人数は表1・2の通りである。

表1 調査対象人数（中学校）

| 区分   | 男子   | 女子   | 計     |
|------|------|------|-------|
| 大規模校 | 163人 | 163人 | 326人  |
| 中規模校 | 148  | 148  | 296   |
| 小規模校 | 197  | 208  | 405   |
| 計    | 508  | 519  | 1,027 |

（注） 大規模校……4校  
中規模校……4校  
小規模校……11校

表2 調査対象人数（高等学校）

| 区 分      | 高 校 1 年 |     |       | 高 校 3 年 |     |       |
|----------|---------|-----|-------|---------|-----|-------|
|          | 男子      | 女子  | 計     | 男子      | 女子  | 計     |
| 普通科（進学校） | 139人    | 43人 | 182人  | 142人    | 37人 | 179人  |
| 普通科（就職校） | 117     | 299 | 416   | 149     | 268 | 417   |
| 農 業 科    | 89      | 56  | 145   | 101     | 51  | 152   |
| 工 業 科    | 152     | 7   | 159   | 143     | 7   | 150   |
| 商 業 科    | 22      | 111 | 133   | 30      | 100 | 130   |
| 家 庭 科    | 0       | 97  | 97    | 0       | 89  | 89    |
| 衛 生 看護科  | 0       | 40  | 40    | 0       | 40  | 40    |
| 計        | 519     | 653 | 1,172 | 565     | 592 | 1,157 |

（注） (1) 調査対象校は普通科（就職校）が5校、看護科が1校、その他の学科はそれぞれ2校である。

(2) 農業科……農業に関する学科のうち、男子は農業科を、女子は生活科を抽出した。

① 調査対象の決定に当っては中学生は規模別男女別、高校生は学科別男女別を母集団としてサンプル人数を抽出した。

② 中学校は地域・規模別、高等学校は学科・地域及び性別を考慮して抽出した。とくに中学校の大規模校は都市地区、中規模校は都市・農村地区、小規模校は農村・山村地区から抽出した。

③ 中学校の学校規模及び高等学校の普通科（進学校）、普通科（就職校）については、次の視点から分類した。

学校規模 大規模校……19学級以上規模の中学校

中規模校……12～18学級規模の中学校

小規模校……11学級以下規模の中学校

普通科（進学校）……昭和49年の進学率が50%以上の高等学校普通科

普通科（就職校）……昭和49年の就職率が70%以上の高等学校普通科

なお、百分率の集計はすべて山形電子計算センターに依頼した。また、すべての項目について、学年別、男女別、規模別、学科別に有意差があるかどうかについてカイ自乗検定を実施した。本文中とくにことわりがない時は1%の有意水準でみたものである。

## I 中・高校生の「仲間性」

### 1 友だち関係

中・高校生期は心理的離乳期とも呼ばれ、身体的心理的に不安定であり、それだけにまた、同じ共通の体験をわかちあうことのできる仲間とその安住の地を求める。人間性の疎外されている現代社会の中で、内面的に結びついた全人的なふれあいは、中・高校生の生きがいの中核であり、大きな喜びといえる。そこでここでは「仲間性」を友だち関係の面からとらえてみたい。

#### 友だちの数

表3. 友だちの数

| 区 分  | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | (%)     |      |       |      |
|------|--------|--------|--------|---------|------|-------|------|
|      |        |        |        | 中学校(規模) | 高3   | 衛生看護科 | 高3   |
|      |        |        |        | 大規模校    | 中規模校 | 小規模校  |      |
| 1人   | 2.3    | 2.3    | 2.9    | 2.8     | 0.7  | 3.2   | 7.9  |
| 2~3人 | 15.2   | 19.8   | 22.8   | 10.2    | 12.2 | 21.0  | 45.0 |
| 4人以上 | 81.5   | 76.4   | 72.3   | 86.1    | 85.5 | 74.8  | 37.5 |
| いない  | 1.0    | 1.5    | 2.0    | 0.9     | 1.0  | 1.0   | 10.0 |

%前後でつづいている。友だちが「いない」と答えた生徒は1~2%で、人数の差こそあれ、中・高校生のほとんど全部が友だちをもっていることがわかる。友だちは中・高校生にとって必要不可欠からざる存在であるといつてよい。学年のちがいをみると、学年が高くなるにつれて「2~3人」が増加し、「4人以上」が減少する。個性や自我を自覚する年齢になるにつれて、友だちの数が少数化する傾向にあるといえよう。有意差は中2と高1・高3の間にみられる。

第二に、中学校の規模別友だち数に注目すると、小規模校に特徴的傾向を見出すことができる。小規模校は大・中規模校に比して、「2~3人」が多く、「4人以上」が少ない。それぞれ約10%のひらきがみられる。つまり、小規模校における友だちの数は少数化しており、数値の上からだけみると高校生にいた現象を呈している。

これらの要因はいろいろ考えられるが、その一つに豊山村の過疎化現象があげられるのではなかろうか。本県の豊山村は産業基盤がもろく、文化施設及び生活便益機能が弱体であったが、経済の高度成長により急激な変貌を遂げる。過疎化現象であり、児童・生徒の激減である。同年代の遊び仲間すらく近くを求めることは困難になっている。このような豊山村の過疎化現象が友だちの少数化に影響を及ぼしているものと推察されるのである。

第三に、高等学校の学科別では高校3年の衛生看護科が特徴的である。衛生看護科と他のすべての学科との間に有意差があり、極端に少数化の傾向がみられる。高3の平均と比較してみよう。友

友だちの数は成長するにつれて量的に増加するのが一般の傾向であるといわれているが、青年期に入るとただ多勢の仲間と一緒ににぎやかに行動するだけでは満足せず、少数の友だちとの深い内面的な結合を求めるようになる。表3は「友だちの数」を示した表であるが、この表から3点について指摘したい。

第一は全般的な傾向であるが、「4人以上」が最も多く、中2で82%、高1は76%、高3は72%となっている。つぎに、「2~3人」が各学年とも約20

だちが「一人」しかいないと反応した生徒は高3の平均3%に対し8%、「2~3人」は23%に対し、45%と多い。友だちが「いない」も2%に比し10%となっている。逆に「4人以上」は72%に対し38%と極めて少ない。衛生看護科は3年後半になると職場実習があり、おたがいに接触する時間が少ないので求めようとしてもなかなかできないのか、他の学科との交流がない(衛生看護科は1クラスだけである)のか、あるいは他の要因があるのかについては今後検討しなければならぬが、いずれにしてもこれは大きな問題である。なお、同じ衛生看護科の1年は「2~3人」が20%、「4人以上」が80%で他の学科とのちがいはみられない。

### 友だちという時の気持

表4. 友だちという時の気持

| 区 分           | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | (%)  |      |      |      |      |      |
|---------------|--------|--------|--------|------|------|------|------|------|------|
|               |        |        |        | 中2男  | 中2女  | 高1男  | 高1女  | 高3男  | 高3女  |
| 楽しい気持になる      | 70.7   | 60.6   | 54.1   | 65.0 | 76.2 | 53.0 | 66.7 | 51.7 | 56.3 |
| おちついた気持になる    | 9.8    | 15.7   | 21.8   | 7.9  | 11.6 | 13.1 | 17.8 | 16.7 | 26.7 |
| がんばろうという気持になる | 2.4    | 3.1    | 3.8    | 3.4  | 1.5  | 3.7  | 2.6  | 4.7  | 3.0  |
| わずらわしい気持になる   | 1.0    | 1.9    | 2.1    | 1.0  | 1.0  | 2.9  | 1.1  | 3.4  | 0.8  |
| べつに何とも思わない    | 16.1   | 18.7   | 18.2   | 22.7 | 9.7  | 27.3 | 11.8 | 23.5 | 13.2 |

ちとの交流の場はたとえそれがどんな所であろうとも、中・高校生にとってはかけがえのない「楽しい安息所」だといえよう。「べつに何とも思わない」は中2に16%、高1・高3に約18%いるが、「楽しい」とか「落ち着いた」とかの特別な気持は起きないが、必ずしもマイナスの感情ではないと思われる。友だちと一緒にいる時「わずらわしい気持」になるというのは1~2%に過ぎない。中・高校生は友だちと一緒にいる時、ある種の心地よさ、居心地のよさといったものを感じているといつてよいであろう。

つぎに学年別にみると、どの学年間にも有意な差異がある。「楽しい気持」になる生徒は中2が71%と最も多く、高1、高3と学年が上がるにつれて減少し、中2と高3では17%のひらきがある。これに対し、「おちついた気持」は逆に学年が高くなるにつれて、それぞれ10%、16%、22%と増加している。自我の発達につれて、心の安定感を求める傾向が強くなっているということであろう。

男女間の差異に注目すると、どの学年の男女間にも有意差がある。女子は男子よりも「楽しい気持」「おちついた気持」ともに多く、「べつに何とも思わない」は男子が多い。「楽しい気持」の男女間のひらきをみると、中2、高1では約10%以上と大きい。高3になると5%と減り、「おちついた気持」は中2、高1は4%と小さく、高3になると10%とそのひらきが大きくなる。中・高校生期の女子の友人関係は男子に比して、より強いウエイトがあり、とくに高3の女子は心

の安定感を志向する生徒が多くなっているといえよう。

## 友だちとやっていること

中・高校生期の友人関係は単なる遊び仲間の結合から、内面的なものへ発展していくといわれているがどうか。表5は「友だちと主にどんなことをやっているか」に対する反応結果である。この表から学年差と男女差の2点について考察したい。

表5 友だちとやっていること (%)

| 区 分                         | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 中<br>2<br>男 | 中<br>2<br>女 | 高<br>1<br>男 | 高<br>1<br>女 | 高<br>3<br>男 | 高<br>3<br>女 |
|-----------------------------|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| いっしょに遊んでいる                  | 38.1   | 25.6   | 19.1   | 51.8        | 24.6        | 36.5        | 16.9        | 30.9        | 8.1         |
| 悩みや苦しみをうちあけて<br>おたがいにげましている | 24.4   | 30.1   | 36.5   | 8.3         | 40.3        | 10.5        | 45.5        | 17.1        | 54.7        |
| 同じ目的のためにおたが<br>いに協力し合っている   | 13.0   | 8.1    | 8.8    | 14.7        | 11.3        | 10.0        | 6.6         | 11.7        | 6.1         |
| なんとなくすごしている                 | 22.0   | 32.8   | 31.5   | 23.6        | 20.5        | 40.7        | 26.8        | 35.3        | 27.9        |
| そ の 他                       | 2.5    | 3.4    | 4.1    | 1.6         | 3.3         | 2.3         | 4.2         | 5.0         | 3.2         |

%のひらきがある。これに対し「悩みや苦しみをうちあけておたがいにげましている」は中2が24%と最も少なく、学年が高くなるに従って増加している。中2の段階では遊び仲間という比較的外的な要因によって結びついた友だちが多いが、高1、高3となるにつれて内面的なふれあいが多くなるといえよう。

「なんとなくすごしている」は中2の22%に対し高校生は約32%となっている。中・高校生期には特別に何かをするという行動の目標があるわけでもなく、気のあった数人の友だちが何となく集まって、そこでぶらぶらしたり話しあったりすることがよくあるが、それが高校生に多いのは予想した通りである。「同じ目的のためおたがいに協力し合っている」という同志的・同好的な結合関係は中・高校生とも10%前後と比較的少ない。

第二に、男女の差異に注目すると、女子は男子に比して親しい友だちに対しては開放性が強く、学年が高くなるに従ってそれがより著しくなるという傾向がみられる。

「悩みや苦しみをうちあけて、おたがいにげましている」「共感開放型」の男子と女子の比率をみると、中2では8%：40%、高1では11%：46%、高3では17%：55%と女子が極めて高く、そのひらきはどの学年も35%前後となっている。男女とも学年が高くなるにつれて、「共感開放型」の生徒が多くなっているが、女子はとくに顕著である。このことは、女子は友だちというごく限られた範囲の中では非常に開放的で情緒的であるといえるのではなかろうか。

一方、「いっしょに遊んでいる」「なんとなくすごしている」はどの学年も男子が多い。中・高校生の男子の友人関係は、遊び仲間的な色彩が濃く、割とドライなところがみられる。中2男の「いっしょに遊んでいる」の52%、高1男の「なんなくすごしている」の41%の数値はこのことを物語っているといえよう。

## 友だちに対する満足感

表6 友だちに対する満足感・不満感 (%)

| 区 分       | 中2   | 高1   | 高3   |
|-----------|------|------|------|
| 満 足       | 26.7 | 15.5 | 17.3 |
| や や 満 足   | 29.9 | 28.9 | 30.8 |
| どちらともいえない | 19.9 | 25.3 | 25.8 |
| や や 不 満   | 17.3 | 22.1 | 17.7 |
| 不 満       | 6.2  | 8.2  | 8.4  |

〔注〕 昭和48年10月調査  
対象人数 中2・1,091人  
高1・1,056人  
高3・1,087人

本県の中・高校生は98%以上の生徒が友だちをもっており、76%以上が友だちと一緒にいる場合は「楽しい安楽所」だと答えているのであるが、ここで友だちに対する満足度について考察したい。表6は友だちに対してどの程度満足しているかを示す表であるが、この表から一つだけ指摘しておきたい。

それはやはり「満足」「やや満足」に反応した生徒が「不満」「やや不満」と答えた生徒よりも多いということである。「満足」「やや満足」を合計すると、中2は57%、高1は44%、高3は48%である。「不満」と「やや不満」

を合わせると、それぞれ24%、30%、26%となる。つまり、友だちに対して満足感を抱いている生徒が約5割前後おり、不満を感じている生徒よりも多いことが理解できよう。

しかし、この約50%前後の数値は友だちと一緒にいる時「楽しい安楽所」だと答えた76%以上の数値に比較すると、必ずしも高すぎる数値とはいえない。友だちと一緒に遊び、共鳴しつつあいながより高い次元の友情を望んでいるものと解すべきであろう。不満を感じている生徒の具体的内容をみると、「なやみをうちあける友だちがいないこと」（中2・65%、高1・55%、高3・49%）と「共通の興味や関心をもっている友だちが少ないこと」（中2・12%、高1・24%、高3・28%）となっている。やはり、中・高校生期は男子、女子にかかわらず「なやみをうちあける友だち」を激しく求めているのである。

## 2 仲間への理解と仲間からの承認

中・高校生が仲間を理解し、仲間から承認され期待されている時には生きがい感を持ち、生活に対して積極的に取り組むことができるが、相手が何を考えているのかわからない、自分も認められていないという状況におかれた時は深刻な疎外感を味わい、ついには生きがいを失うようになることも考えられる。そこでここでは、学校生活で自己の生活に関係の深いクラス・部・友人に焦点をあてて理解と承認について考察したい。

## クラス員の意識や行動に対する理解

表7 クラス員の意識や行動に対する理解度 (%)

| 区 分        | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 高<br>3<br>男 | 高<br>3<br>女 | 中学2年             |                  |                  |               | 高校3年          |                                                                                 |
|------------|--------|--------|--------|-------------|-------------|------------------|------------------|------------------|---------------|---------------|---------------------------------------------------------------------------------|
|            |        |        |        |             |             | 大<br>規<br>模<br>校 | 中<br>規<br>模<br>校 | 小<br>規<br>模<br>校 | 普<br>通<br>(男) | 普<br>通<br>(女) |                                                                                 |
| よく理解できる    | 24.2   | 16.6   | 12.2   | 16.9        | 7.6         | 34.2             | 21.1             | 18.6             | 26.4          | 6.3           | 表7は「クラス員の考<br>えや行動を理解できるか」<br>という問に対する反応結<br>果を整理したものである<br>が、この表から四つ指摘<br>したい。 |
| すこし理解できる   | 70.9   | 69.7   | 60.9   | 60.7        | 61.2        | 61.5             | 74.9             | 75.5             | 63.5          | 52.4          |                                                                                 |
| ほとんど理解できない | 4.9    | 13.7   | 26.9   | 22.4        | 31.2        | 4.3              | 4.0              | 5.9              | 10.1          | 41.3          |                                                                                 |

一つは、学年のちがいであるが、どの学年間にも有意差がある。「よく理解できる」「すこし理解できる」は学年が高くなるにつれて減少し、「ほとんど理解できない」は逆に学年が高くなるに従って増加する。中2の段階では「よく理解できる」「すこし理解できる」を合計すると94%になり、程度の差こそあれ、クラス員の意識や行動を理解しているようであるが、高3は27%が「ほとんど理解できない」と反応している。世代間の断絶ということがいわれているが、それにもまして同世代の意識や行動を理解できない生徒が高3に3割近くもいるということが問題であろう。高学年になると友だちが少数化し、接触する仲間も限定されてくるので、ホームルームや生徒会活動における話し合い活動の充実がとくに望まれる所以である。

二つは、男女間では、中2・高1に差異はないが、高3に有意差がある。「よく理解できる」は男子が多く、「ほとんど理解できない」は女子が多い。それぞれ10%ずつのひらきがある。高3の女子は限られたごく少数の友だちとは親しく接触しているが、友だち以外に対しては同性に対しても比較的閉鎖的であるため、男子に比べると理解度に乏しいといえるのではなかろうか。

第三に、中学校の規模別に注目したい。中学校では大規模校と中・小規模校との間に有意差がある。「よく理解できる」は大規模校が多く、「すこし理解できる」は中・小規模校が多い。とくに豊山村地区にある小規模校はクラスの人数も少ないので、おたがいの交流も深く、クラス員の考えや行動をよく理解しているものと予想したが、逆に大規模校の理解度が大きい。中・小規模校の要求水準が高いのか、その他に要因があるのかは今後検討しなければならないが、クラスの人数が少数化しても必ずしも理解度が高まるとはいえないようである。

さいごに、学科間のちがいをみると、高1、高3とも普通科（進学）と他の学科との間に有意差がある。高1の場合は、「よく理解できる」は普通科（進学）が多いが、「ほとんど理解できない」はあまりかわりがない。しかし、高3になると普通科（進学）は「よく理解できる」が多く、「ほとんど理解できない」は普通科（進学）以外の学科が多い。

とくに差異の大きい高3の普通科（進学）と普通科（就職）をみてみよう。「よく理解できる」は26%：6%と普通科（進学）が多く、「ほとんど理解できない」は10%：41%で普通科（就職）が多い。これらの要因の一つに進路の問題が考えられる。普通科（進学）は大学受験という目標があるため、生活も共通した面があるが、普通科（就職）では目標が多様化しているため生活それ自体も一様ではない。このためクラス員の意識や行動が理解できないと答えている生徒が比較的多いではなかろうか。

## 部員の意識や行動に対する理解

中・高校生にとって部は最も生き生きとした場であり、自主的積極的な活動であろう。まず部活動への参加率をみると、中2は96%、高1・高3はともに89%で、約9割以上の生徒が部活動に参加しているといってよい。表8は部員の意識や行動に対する理解度を示す表である。

まず全般的にみると、「すこし理解できる」が全体の約半数で最も多く、「よく理解できる」「ほとんど理解できない」とづいている。

ここで注目したいのは男女のちがいである。有意差はどの学年にもみられる。クラス員に対して

表8 部員の意識や行動に対する理解

| 区 分             | 中2   | 高1   | 高3   | 中2男  | 中2女  | 高1男  | 高1女  | 高3男  | 高3女  |
|-----------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| よく理解できる         | 37.5 | 22.1 | 24.5 | 42.3 | 32.8 | 25.0 | 19.8 | 28.2 | 21.1 |
| すこし理解できる        | 52.5 | 51.2 | 47.7 | 46.5 | 58.5 | 43.5 | 57.0 | 43.4 | 51.6 |
| ほとんど理解できない      | 5.6  | 15.4 | 16.6 | 5.1  | 6.0  | 15.0 | 15.8 | 12.2 | 20.7 |
| 部に入っていないからわからない | 4.4  | 11.3 | 11.2 | 6.1  | 2.7  | 16.4 | 7.4  | 16.2 | 6.6  |

られる。このことについては後述したい。

## クラスからの承認

表9 クラスからの承認

| 区 分                | 中2   | 高1   | 高3   |
|--------------------|------|------|------|
| 「たいへん認められている」と感じる  | 4.2  | 1.7  | 1.9  |
| 「すこし認められている」と感じる   | 67.3 | 51.8 | 52.6 |
| 「ほとんど認められていない」と感じる | 28.5 | 46.5 | 45.5 |

間集団から承認され期待されている時は生活にもハリがでてくるが、逆に、承認されていないような状況が続くと、孤独感にさいなまれ、疎外感を味わうようになる。クラスの人から「ほとんど認められていない」と感じている生徒は、中2で29%、高1は47%、高3は46%となっている。

高校生は約半数近くが自分の長所を認められていないと感じているのである。クラスは学年当初は客観的な所属集団であるが、主観的な準拠集団に高めるための取り組みがもっとあってよいのではなかろうか。自分の座る椅子が居心地のよいものであることを願わない生徒はひとりもないと思うからである。

ここで、「クラスの雰囲気」に対する満足感・不満感の傾向をみてみよう。まず全体についてみ

表10 クラスの雰囲気に対する満足感・不満感

| 区 分       | 中2   | 高1   | 高3   |
|-----------|------|------|------|
| 満 足       | 30.2 | 17.1 | 21.2 |
| どちらともいえない | 24.7 | 27.7 | 27.3 |
| 不 満       | 45.1 | 55.2 | 51.5 |

昭和48年10月調査  
対象人数

中2・1,091人  
高1・1,056人  
高3・1,087人

ると、「不満」に反応した生徒は中2で45%、高1・高3は50%以上で、「クラスの雰囲気」に不満を抱いている生徒が5割前後いることがわかる。不満の具体的な内容では「生徒同志のつながりのないこと」（中2・50%、高1・41%、高3・44%）が多い。つまりおたがいの理解と承認に欠け、バラバラな生活を送っていることに対する不満が多い。自分のなした貢献や自分のもつ能力が集団成員から認められ、おたがいに理解し合い、連帯が深まった時にクラスは向上する。理解し合い、認めあう機会を積極的につくっていただきたいものである。

## 部員からの承認

表 11 部員からの承認

| 区 分                 | (%)    |        |        |             |             |             |             |             |             |
|---------------------|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|                     | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 中<br>2<br>男 | 中<br>2<br>女 | 高<br>1<br>男 | 高<br>1<br>女 | 高<br>3<br>男 | 高<br>3<br>女 |
| たいへん認め<br>られている     | 9.3    | 3.8    | 7.0    | 13.6        | 5.2         | 4.8         | 2.9         | 9.7         | 4.6         |
| すこし認め<br>られている      | 64.7   | 47.7   | 49.5   | 59.0        | 70.1        | 47.1        | 48.3        | 48.1        | 50.8        |
| ほとんど認め<br>られていない    | 20.9   | 36.1   | 29.8   | 20.5        | 21.4        | 29.5        | 41.3        | 22.2        | 37.0        |
| 部に入っていない<br>のでわからない | 5.1    | 12.4   | 13.7   | 6.9         | 3.3         | 18.6        | 7.5         | 20.0        | 7.6         |

表 11 は部員からの承認度を示す表である。まず全般的にみると「すこし認められている」が中 2 で 65%、高 1・高 3 は約 50% で最も多く、「ほとんど認められていない」「たいへん認められている」とつづいている。

学年のちがいをみるとどの学年も有意差がある。「すこし」「た

いへん」はともに中 2、高 3、高 1 の順となっており、「ほとんど認められていない」は逆に高 1 高 3、中 2 の順になっている。高 1 は入部してからの経験年数が最も短く、部において自分の能力を発揮する場をあまり与えられていないことも要因の一つであろう。部活動はその課題達成において強烈な目的意識をもった活動であり、その課題達成のために汗水をたらし、血のにじむ努力をする。それはそれで十分に意義のあることであるが、それと同時に、部活動を通してクラブ会員との理解や承認も大切なことであると思われる。「ほとんど承認されていない」と感じている生徒が高 1 に 36% もいるが、課題達成の意識が強すぎると、一部の生徒だけの活動になりやすくなる。承認されていないと答えている生徒への配慮を怠ってはならない。

男女の差異をみると、どの学年にもちがいがみられる。「たいへん」は男子が多く、「すこし」「ほとんど認められていない」は女子が多い。とくに高校の女子は「ほとんど認められていない」と感じている生徒が比較的多い。

部は興味や活動を同じくする同志の結合が強く、部員の共通目標のためにはある程度個人的なものを犠牲にする場合もでてくる。したがって、その共通目標に対する意識の強さが部を支えている。女子の特徴として現実の人間関係を重視する傾向がみられたが、これが目標達成に先行する場合はしばしば生じてくる。前の理解度でもみたように、女子は男子に比して、部員の意識や行動を「たいへん理解できる」と感じている生徒が少なく、みんなからも認められていないと思っている生徒が多いのである。ある高校の部の顧問教師が、「部員をまとめるのは女子の方が困難である」というていたが、女子は男子に比して承認の欲求が強く、目標達成よりも人間関係を重視するからではなかろうか。

## 友だちからの承認

表 12 は友だちからの承認度を示す表であるが、この表からつぎのことが指摘できる。

一つは、9割以上の中・高校生が「たいへん」もしくは「すこし」承認されていると感じていることである。これは、学年・男女・規模・学科にかわりがない。「たいへん」も「すこし」もクラス・部よりは多く、クラス・部のいずれからも認められていない生徒も友だちからは認められていると感じている。程度の差はあるが、生徒の大部分は友だちから承認されているといつてよい。友だ

表 12 友だちからの承認

| 区 分                | (%)    |        |        |                  |                  |                  |  |  |  |
|--------------------|--------|--------|--------|------------------|------------------|------------------|--|--|--|
|                    | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 中学校(規模)          |                  |                  |  |  |  |
|                    |        |        |        | 大<br>規<br>模<br>校 | 中<br>規<br>模<br>校 | 小<br>規<br>模<br>校 |  |  |  |
| たいへん認め<br>られている    | 23.7   | 21.3   | 20.7   | 28.6             | 25.8             | 18.1             |  |  |  |
| すこし認め<br>られている     | 68.9   | 69.1   | 69.2   | 64.3             | 67.5             | 73.7             |  |  |  |
| ほとんど認め<br>られていない   | 6.8    | 8.8    | 8.8    | 6.5              | 6.0              | 7.7              |  |  |  |
| 友だちがいない<br>のでわからない | 0.6    | 0.8    | 1.3    | 0.6              | 0.7              | 0.5              |  |  |  |

こそはまさしく「楽しい安眠所」である。ただ、友だちにすら「ほとんど認められていない」「友だちがいないからわからない」と答えた生徒を合わせると中 2 で 7%、高 1・高 3 で 10% となっているが、これは問題であると思われる。

二つは、小規模校は大・中規模校に比して「たいへん認められている」と感じている生徒が少ない。小規模校は友だちの数も少数化の傾向がみられたが、友だちからの承認度も低い。農山村の変貌は友だちの数のみでなく、なかみにまでも影響を及ぼしているようである。

## Ⅱ 中・高校生の「未来性」

### 1 将来に対する考え方

中・高校生に生きがいを与えるのは希望である。現在がいかに不幸、苦痛であっても未来に希望や期待を抱き、将来の夢を描いてその実現に努力している時は充実した生活になる。逆に、現在の生活が豊かに満ち足りていても、未来に夢や希望が設定できない時は、不安やいらだちが強まってこよう。そこでここでは現在の中・高校生が未来の展望をどのようにとらえているかを明らかにしていきたい。

### 将来の見通し

表 13 将来に対する見通し

| 区 分 | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 中<br>2<br>男 | 中<br>2<br>女 | 高<br>1<br>男 | 高<br>1<br>女 | 高<br>3<br>男 | 高<br>3<br>女 | 中学校(規模)          |                  |                  |
|-----|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------------|------------------|------------------|
|     |        |        |        |             |             |             |             |             |             | 大<br>規<br>模<br>校 | 中<br>規<br>模<br>校 | 小<br>規<br>模<br>校 |
| 希望型 | 20.9   | 19.5   | 22.3   | 17.7        | 24.1        | 18.7        | 20.2        | 21.7        | 22.9        | 27.1             | 19.8             | 16.8             |
| 楽観型 | 20.4   | 26.9   | 40.8   | 25.8        | 15.2        | 34.1        | 21.1        | 41.8        | 39.7        | 19.4             | 22.5             | 19.8             |
| 不安型 | 24.6   | 20.6   | 29.5   | 23.0        | 26.2        | 18.9        | 22.1        | 27.4        | 31.5        | 21.8             | 24.2             | 27.2             |
| 稀薄型 | 34.1   | 33.0   | 7.4    | 33.5        | 34.5        | 28.3        | 36.6        | 9.1         | 5.9         | 31.7             | 33.5             | 36.2             |

| 区 分 | 高校 1 年(学科) |           |        |        |        |        |          | 高校 3 年(学科) |           |        |        |        |        |          |
|-----|------------|-----------|--------|--------|--------|--------|----------|------------|-----------|--------|--------|--------|--------|----------|
|     | 普通<br>(進)  | 普通<br>(就) | 農<br>業 | 工<br>業 | 商<br>業 | 家<br>庭 | 衛生<br>看護 | 普通<br>(進)  | 普通<br>(就) | 農<br>業 | 工<br>業 | 商<br>業 | 家<br>庭 | 衛生<br>看護 |
| 希望型 | 17.8       | 19.8      | 23.6   | 17.0   | 17.3   | 17.5   | 32.5     | 20.1       | 22.4      | 20.0   | 23.3   | 20.9   | 35.2   | 12.5     |
| 楽観型 | 33.4       | 22.7      | 25.7   | 37.7   | 21.8   | 17.5   | 42.5     | 53.1       | 39.2      | 40.7   | 33.4   | 34.1   | 41.0   | 52.5     |
| 不安型 | 19.4       | 25.8      | 18.2   | 19.5   | 18.0   | 12.4   | 15.0     | 22.3       | 32.1      | 31.6   | 29.3   | 35.7   | 19.3   | 27.5     |
| 稀薄型 | 29.4       | 31.7      | 32.5   | 25.8   | 42.9   | 52.6   | 10.0     | 4.5        | 6.3       | 7.7    | 14.0   | 9.3    | 4.5    | 7.5      |

表13は「将来に対しどのような見通しをもっているか」に対する反応結果を示す表である。この表から4点について考察したい。

まず第一に指摘したいのは、中2・高1では「将来について深く考えていない」という「稀薄型」が約33%と最も多く、高3では「何とかなるだろうと思っている」という「楽観型」が41%と最も多いということである。青年は未来に対する可能性に生きるといわれている。中・高校生期は未来に対する予測がまだ十分にされていないとはいえ、ある程度の予知は可能な年代である。自分の将来を考えた時、希望がでたり不安になったり、時にはそれらが入りまじった複雑な感情になるものと思われる。しかし、豊かさの中で成長した中・高校生は、現実の生活の中に埋没し、「将来に対し深く考えず」、いざ進路の選択を迫られた時に「何とかなるだろう」と楽観している。また表13をみてわかるように、中2・高1の段階では将来「稀薄型」の生徒も多い。「楽観型」と「稀薄型」を合計すると、中2では55%、高1では59%と半数を超している。これらの生徒は自己の将来に対し真剣に取り組んでいるとはいえないのではなかろうか。「明るい希望をもっている」という「希望型」はどの学年も20%前後でかわりがなく、「明るい見通しがたてにくく不安である」という「不安型」は高1が21%で最も少なく、中2は25%、高3が30%と最も多い。「不安型」の多少は進路決定期日までの期間と一致しており、高3に「不安型」が多いのは進路決定を迫られているからであろう。

つぎに、男女差をみると、高3にちがいがなく中2と高1に有意差がある。まず中2の男女間を比較すると、「希望型」「不安型」はともに女子が多く、「楽観型」は男子が多い。将来「稀薄型」は男女ほとんどかわりがない。中2の男子は女子に比べて比較的楽観的な見通しをしている生徒が多いといえよう。

高1では「希望型」「不安型」は男女間ではほとんどかわりがなく、「楽観型」は男子が多く、「稀薄型」は女子に多い。高1の男子も中2の男子と同じように、将来については楽観的な見通しをたてている生徒が多い。目の前に進学・就職試験のひかえている高3を除くと、男子は比較的自分の将来について楽観的であるといえよう。

三つは、中学校における規模別差異である。大・中・小規模校それぞれの校種間に有意差がある。「希望型」は大規模校が最も多く、中・小規模校とつづいている。大規模校と小規模校の間には約10%のひらきがみられる。これに対し、「不安型」は小規模校が最も多く、中・大規模校になるに従って減少している。小規模校の多い豊山村地区は零細な生産基盤と不便な生活環境の中で日々の生活を送っているのであるが、これらが中学生の将来に対する見通しにも大きな影響を及ぼしているようである。

さいごに、学科別についてみると、高校1年では衛生看護科と他の学科との間に大きなちがいがみられる。「希望型」は他の学科の20%前後と比較すると33%と高く、将来に対して「稀薄型」の生徒は10%と最も低い。一般に高1では「稀薄型」の生徒が多く、家庭科では53%もあり、衛生看護科の次に少ない工業科でも26%である。その中で衛生看護科の10%は極めて低い数値であり、進路の最終的な意志決定を迫られている高3とはほぼ似た数値である。高1の段階では衛生看護科以外の生徒は将来の方向が未確定なのに対し、衛生看護科の場合将来看護婦になるというは

っきりした目標をもっている。この目標決定が、「希望型」が多く「稀薄型」が少ない要因であるように思われる。しかし、高3になると「希望型」が減少し「不安型」が増加するが、これは高等看護婦の資格を得るため同校に設置されている専攻科に入学したいという進学上の不安が、理由であると思われる。

高校3年では家庭科が特徴的である。家庭科と他の学科とを比較すると、家庭科は「希望型」が多く「不安型」が少ない。家庭科の「希望型」は35%で、家庭科の次に高い工業科と12%衛生看護科とは23%のひらきがある。これらの要因については今後検討しなければならないが、家庭科の生徒は他の学科と比べると、将来に対し明るい見通しをもっているものが多く、暗い展望をもっているものが比較的少ないといえるのではなかろうか。

### 明るい見通しをもてない理由

将来に対し明るい見通しがもてず不安な生徒が、中2で52%、高1で21%、高3で30%いるが、なぜ明るい見通しがもてないであろうか。表14は「明るい見通しがもてない理由」を示す表である。

表14 明るい見通しがもてない理由 (%)

| 区 分                 | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 高3<br>農業科 |
|---------------------|--------|--------|--------|-----------|
| 自分の進路に期待がもてないから     | 24.4   | 22.3   | 25.3   | 41.7      |
| 自分の希望する進路に進めそうもないから | 38.8   | 29.9   | 25.1   | 14.6      |
| 自分の能力や健康に自信がもてないから  | 17.2   | 24.5   | 23.9   | 18.8      |
| な ん と な く           | 14.8   | 15.5   | 16.6   | 29.8      |
| そ の 他               | 4.8    | 8.8    | 9.1    | 2.1       |

これをみると、「自分の進路に期待がもてないから」「自分の期待する職業に進めそうもないから」「自分の能力や健康に自信がもてないから」に分散している。これは学年・男女・規模・学科にあまりかわりがない。

ただ、ここで一つだけ問題点を指摘しておきたい。それは高校3年における農業科の生徒が、自分の将来に対し明るい見通しがもてず不安なのは、「自分の進路に期待がもてないから」だと答えた生徒が42%もいるということである。農業科の「不安型」は商業科の36%について、普通科（就職）と同様32%と多いのであるが、これらの「不安型」のうち4割以上もの生徒が、自分の進路そのもの

ものに期待がもてない反応している。農業科の生徒は農業後継者として学習しているのであるが、農業の将来に期待がもてず、さればといって他に就職を求めても理想とする職業とは程遠い。事実農業をつぐ農業科の生徒よりも就職する生徒が増えてきているが、農業の将来に対する不安が42%の数値になって現われているものと推察される。

### 将来の生き方

中・高校生と未来とのかかわりはどうであろうか。中・高校生の生きがいは自己の目標を設定し、それに向ってひたすらに努力をする時生ずるものである。表15は「あなたは将来に向かってどのような生き方をしたいと思うか」に対する反応結果を示す表である。

まず、全般的な傾向をみると、「将来の目標に向って努力はするが、現在の生活も楽しみたい」とする「折衷型」が、どの学年も65%前後で最も多い。つまり高い理想水準を掲げてそれに到達

表 15 将来の生き方

| 区 分   | (%)    |        |        |               |             |                    |
|-------|--------|--------|--------|---------------|-------------|--------------------|
|       | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 高<br>通<br>(進) | 1<br>家<br>庭 | 高<br>3<br>通<br>(進) |
| 将来努力型 | 10.4   | 8.6    | 16.0   | 16.9          | 7.2         | 34.1               |
| 折衷型   | 64.4   | 67.6   | 66.8   | 74.1          | 56.7        | 56.4               |
| 現実享楽型 | 15.3   | 14.8   | 12.4   | 4.5           | 26.8        | 5.6                |
| 不 明   | 9.9    | 9.0    | 4.8    | 4.5           | 9.3         | 3.9                |

ないので現在の生活を楽しく送った方がよい」という「現実享楽型」は比較的少ない。つまり、現代の中・高校生は「将来努力型」でもないし、さればといって現実享楽者でもない。大部分の生徒は「折衷型」であるといつてよいであろう。

つぎに、学年ごとの傾向をみると中2・高1と高3の間に有意差がある。「折衷型」は各学年ともかわらないが、中2・高1は「将来努力型」よりも「現実享楽型」が多い。それに対し高3は「現実享楽型」よりも「将来努力型」が多い。高3は卒業年度であるため将来に対する取り組み方が、中2・高1とは異なって現われているようである。

「将来の生き方」に対する反応は、男女・規模に顕著な差異はみられないが、学科別で特徴的なものを二つばかりあげておく。

一つは、普通科(進学)は他の学科に比し、高1・高3とも「将来努力型」が多く、「現実享楽型」が少ないということである。平均との差をみてみよう。「将来努力型」では平均よりも普通課程(進学)が高1で8%、高3では18%多く、「現実享楽型」の生徒は高1で10%、高3は7%少ない。普通科(進学)の生徒は大学受験があるため、現在の楽しみをある程度おさえても目標貫徹のためには努力すべきだと考えている未来志向型の生徒が比較的多いといえよう。

二つは、高1の家庭科に「現実享楽型」が27%と最も多い。高1の平均が15%であるから12%多く、普通科(進学)とでは22%のひらきがある。家庭科の女子は「将来のことはわからないので現在の生活を楽しく送った方がよい」という現実志向型の生徒が他の学科よりも比較的多い。

### 中・高校生の理想性

中・高校の理想を知る一つの手がかりとして、どんな人物を尊敬しているから推察する方法が考えられる。表16は「あなたはどんな人物を尊敬しているか」に対する自由記述を整理したものである。この表から3点について指摘したい。

第一に、「いない」と反応した生徒が中2で35%、高校生は半数以上と多い。これは中学生よりも高校生の方が特定の人を理想化し、それに憧れ尊敬するといった傾向が薄れていることを物語るものといえよう。ただ、「いない」と反応した中・高校生全部が理想性に欠けると一概に断定するのは危険である。「いない」に反応した生徒の中にも、心から尊敬する理想の人物を求めつつある生徒がかなりいるものと思われるからである。

第二は、現代の中・高校生は身近な人に尊敬する人物を見出している。かつては、間接的抽象的

しようと努力するよりは、手近なところに目標を設定しそれに努力をしよう、しかし、現在の快適な生活を犠牲にしてまで理想を実現する必要はないと考えているのである。このような考え方は成人のそれであり、現代の中・高校生の「将来の生き方」に対する考え方にはおとなと似かよった現実的な側面がみられる。「将来の目標を達成するため現在の楽しみはある程度おさえて努力すべきだ」という「将来努力型」や「将来のことなどわから

表 16 尊敬する人物 (%)

| 区 分    | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 |
|--------|--------|--------|--------|
| 父      | 14.0   | 10.6   | 7.8    |
| 母      | 12.2   | 7.6    | 5.5    |
| 両 親    | 2.4    | 2.1    | 2.6    |
| 家族のたれか | 5.7    | 4.4    | 3.0    |
| 友人・先輩  | 8.6    | 3.2    | 2.6    |
| 先 生    | 5.3    | 4.4    | 3.3    |
| そ の 他  | 16.9   | 16.4   | 18.9   |
| 不 明    | 3.49   | 51.3   | 56.3   |

経験から尊敬する人物を求め、それに同一化する傾向がみられたが、いまの生徒は自分の直接的具体的経験を通して尊敬する人物を得ているといえよう。両親・家族・友人・先生をあげた生徒は中2で48%、高1は32%、高3は25%となっている。これを、尊敬する人物が「いる」と反応した生徒数からの比率でみると、中2・87%、高1・67%、高3・57%となっている。自ら尊敬する人を求めるというのではなく、ごく身近な人を選んでいるという姿勢がみられる。前述したように高い理想を抱くというよりは、小市民的な片隅の幸福を願う中・高校生が多くなっているといえよう。

第三は、中2では両親・家族・友人・先生以外で最も尊敬している人物はJ・F・ケネディ、ヘンクラー、シュヴァイツァー、リンカーン、キュリー夫人などであり、一般に人道主義者を高く評価している。しかし、高校生になると尊敬する人物も多様化してくる。調査対象が高校生の場合1・3年を合計すると2,000人以上いるが、5人以上の高校生から尊敬されている人物は誰もいない。比較的集中しているのは衛生看護科におけるナイチンゲールだけである。中学生は外国人の人道主義者が多いが、高校生になると日本人もかなり登場する。中学生は日本人にしる外国人にしる歴史上の人物をあげているが、高校生は外国人は歴史上の人物、日本人は歴史上の人物もいるが、現存する人をより多くあげているようである。日本人は、フォーク歌手・野球選手・作家・科学者・経済人・政治家など多彩であるが、いずれもマスコミで喧伝されている人が多い。

### 中・高校生の職業観

中・高校生はどのような職業観を抱いているのだろうか。表17は「自分の職業を選ぶ時どんなことを重視するか」に対する反応結果である。

表 17 期待する職業

| 区 分         | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 中<br>2<br>男 | 中<br>2<br>女 | 高<br>1<br>男 | 高<br>1<br>女 | 高<br>3<br>男 | 高<br>3<br>女 |
|-------------|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 個性や能力にあった職業 | 51.1   | 64.3   | 58.7   | 52.6        | 49.7        | 66.3        | 62.0        | 60.8        | 56.9        |
| 平凡でも安定した職業  | 30.3   | 18.7   | 24.5   | 26.4        | 34.1        | 16.2        | 25.6        | 20.1        | 28.6        |
| 余暇や収入の多い職業  | 7.8    | 9.3    | 7.7    | 9.9         | 5.8         | 10.2        | 5.1         | 10.2        | 5.4         |
| 世の中に役立つ職業   | 9.5    | 5.0    | 5.5    | 9.9         | 9.1         | 4.4         | 5.4         | 5.0         | 6.1         |
| そ の 他       | 1.3    | 2.7    | 3.5    | 1.2         | 1.3         | 2.9         | 1.9         | 3.9         | 3.0         |

現代の産業社会では個性や能力を生かせなくとも働かねばならないのが現状である。これらのことを前提としても、現代の中・高校生は自己実現の可能性のある職業を強く期待しているといえよう。

つぎに多いのは「平凡でも安定した職業」である。半数以上の生徒が自己実現の可能性のある職業を望んでいるが、「平凡でも安定した職業」を望んでいる生徒も中2で30%、高1は19%、

この表をみると、中・高校生の約半数以上が「個性や能力にあった職業」と答えており、自己実現の可能性のある職業を強く志向していることがわかる。しかし、これはあくまで期待する職業であって、生徒が果して自己の個性や能力を十分に握っているかといえ疑問が残るし、「個性や能力にあった職業」や職場が望み通りにあるかといえばこれもまた問題である。さらに

高3は25%と比較的多い。豊かな社会の中で成長してきた中・高校生は快適な波風のあまりたない生活を送るためには、平凡でもよいから安定した職業をと考えているのであろう。

ただ、ここで気になるのは、高校生よりも中学生が「平凡でも安定した職業」に反応した生徒が多いということである。「将来の生き方」でも「現実享楽型」が少差ではあるが中2に多かったのであるが、現実には埋没し、片隅の幸福を求める傾向が低年齢層にまで広がっているとすれば、これは大きな問題であらう。「余暇や収入の多い職業」「世の中に役立つ職業」はどの学年もそれぞれ10%以下と少ない。

第二に男女別のちがいがいるが、どの学年の男女間にも有意差がある。男子は女子に比して、「個性や能力にあった職業」「余暇や収入の多い職業」を求め、女子は「平凡でも安定した職業」を望んでいる。つまり、男子は職場に対しては自己実現の可能性があり、職場外では余暇とそのための収入を望んでおり、女子は平凡でも安定した職業の方がよいといっているのである。

表12 期待する職業

| 区 分             | 中学校(規模) |      |      | 高校1年(学科) |       |      |      |      |      |         |       | 高校3年(学科) |      |      |      |      |         |       |       |
|-----------------|---------|------|------|----------|-------|------|------|------|------|---------|-------|----------|------|------|------|------|---------|-------|-------|
|                 | 大規模校    | 中規模校 | 小規模校 | 普通(進)    | 普通(就) | 農(進) | 工(進) | 商(進) | 家(進) | 衛生看護(進) | 普通(進) | 普通(就)    | 農(進) | 工(進) | 商(進) | 家(進) | 衛生看護(進) | 普通(進) | 普通(就) |
| (1) 個性や能力にあった職業 | 57.5    | 54.5 | 43.6 | 6.8      | 9.6   | 5.6  | 5.1  | 4.7  | 6.3  | 9.5     | 7.0   | 2.5      | 7.5  | 5.2  | 6.0  | 4.5  | 6.6     | 2.1   | 3.7   |
| (2) 平凡でも安定した職業  | 25.5    | 26.6 | 36.9 | 7.2      | 2.0   | 5.2  | 5.0  | 1.2  | 2.0  | 2.5     | 6.8   | 1.2      | 5.8  | 3.3  | 2.4  | 8.2  | 2.8     | 7.7   | 3.0   |
| (1) - (2)       | 32.0    | 27.9 | 6.7  | 6.1      | 7.4   | 5.1  | 2.6  | 4.5  | 8.9  | 3.9     | 1.3   | 7.3      | 6.0  | 3.1  | 7.4  | 3.5  | 3.1     | 3.4   | 7.5   |

それでは、つぎに規模別(中学校)と学科別(高校)についてみてみよう。

規模別では、大規模校と小規模校の間に有意差がみられる。大規模校の生徒は小規模校の生徒よりも「個性や能力にあった職業」を望むものが多く、小規模校では「平凡でも安定した職業」を期待している生徒が多い。「個性や能力にあった職業」と「平凡でも安定した職業」の差をみると、大規模校では32%もいるのに小規模校は7%に過ぎない。小規模校の多い農山村地区には自己の能力や適性を生かせる職場が現実には少ないということが大きな要因と思われる。しかし、中学2年の段階から自己実現をはかる職場をあきらめ、「平凡でも安定した職場」を求めている生徒が大・中規模校に比べて多いということは、農山村地区の進路指導を行う場合の問題点といえよう。

学科間の差異は、高1では普通(進学)・工業科と普通(就職)・農業・商業・家庭・衛生看護の各学科に、高3では普通科(進学)と普通科(進学)以外のすべての学科間にみられる。高1・高3の普通科(進学)と高1の工業科はそれ以外の学科に比して「個性や能力にあった職業」が多く、

「平凡でも安定した職業」が少ない。その差をみると、普通科(進学)では高1・高3とも60%以上(工業科高1は59%)のひらきがみられる。つまり、普通科(進学)・工業科(高1)は自己実現の可能性のある職業を強く望んでいるといえよう。

なお、衛生看護科が「個性や能力にあった職業」に高1で50%、高3で38%と意外に少ないが、これは「世の中に役立つ職業」に反応した生徒が多かったためである。「世の中に役立つ職業」は高1、高3とも衛生看護科以外は5%前後であるが、衛生看護科は高1で28%、高3で21%と多

い。将来看護婦として病人の世話をするという使命感がこの数値に示されているよう。

## 大学進学希望

表18 大学進学希望

| 区 分     | 中2   | 高1   | 高3   | 中2男  | 中2女  | 高1男  | 高1女  | 高3男  | 高3女  | 中学校(規模) |      |      |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|---------|------|------|
|         | 2    | 1    | 3    | 男    | 女    | 男    | 女    | 男    | 女    | 大規模校    | 中規模校 | 小規模校 |
| 進学したい   | 29.7 | 33.9 | 45.5 | 36.0 | 23.6 | 43.9 | 25.9 | 51.0 | 40.2 | 45.1    | 29.2 | 17.8 |
| 進学したくない | 38.0 | 33.7 | 37.9 | 32.3 | 43.6 | 27.6 | 38.6 | 31.4 | 44.1 | 23.1    | 36.6 | 51.0 |
| わからない   | 32.3 | 32.4 | 16.6 | 31.7 | 32.8 | 28.5 | 35.5 | 17.6 | 15.7 | 31.8    | 34.2 | 31.2 |

(%)

| 区 分     | 高校1年(学科) |       |      |      |      |      |         | 高校3年(学科) |       |      |      |      |      |         |
|---------|----------|-------|------|------|------|------|---------|----------|-------|------|------|------|------|---------|
|         | 普通(進)    | 普通(就) | 農(進) | 工(進) | 商(進) | 家(進) | 衛生看護(進) | 普通(進)    | 普通(就) | 農(進) | 工(進) | 商(進) | 家(進) | 衛生看護(進) |
| 進学したい   | 91.1     | 28.7  | 18.2 | 21.4 | 16.5 | 16.5 | 37.5    | 95.5     | 39.4  | 30.3 | 34.7 | 24.0 | 28.4 | 90.0    |
| 進学したくない | 1.7      | 33.7  | 52.7 | 38.4 | 48.9 | 38.1 | 27.5    | 2.8      | 48.1  | 44.5 | 36.0 | 51.9 | 47.7 | 5.0     |
| わからない   | 7.2      | 37.6  | 29.1 | 40.3 | 34.6 | 45.4 | 35.0    | 1.7      | 12.6  | 25.2 | 29.3 | 24.1 | 23.9 | 5.0     |

昭和49年の大学進学率をみると、全国平均は32.3%で、本県は21.3%、全国で45位となっている。本県の高校進学率は49年度9割を超え、50年度の希望調査では約93%に及んでいる。東北で最高位はもちろん全国でもかなりの高位を占めるが、大学進学となると比較的低い。そこでここでは、これらの背景を「大学進学希望」という側面から洗ってみたい。

表18は大学進学希望調査表であるが、この表から、学年・男女・規模・学科別の順に述べることにする。ただ、この調査では「あなたは将来大学まで進学したいか」と問うたのであるが、生徒は大学を必ずしも法律で定められた大学と解さず、各種学校を含む上級学校進学と混同したむきがあることを予めことわっておきたい。

まず、学年ごとにとみると、大学進学を希望する生徒は高3が46%と最も多く、学年が低くなるに従って減少している。仮説として中2の段階では大学進学希望の生徒はかなりの多いが、学年が高くなるに従って自己の能力も理解でき、家庭の条件等もあって次第に減少するものと考えたが逆の結果が生じたのは予想外であった。高3に大学進学希望者が46%と多いが、友だちが大学進学のために努力している姿を見た時、やはり自分も大学に進学したいと考えるのは当然であるかも知れない。中2に進学希望者が30%と少ないが、本県の場合、大学がまだ一般化していないし、大学進学は速い将来のことであり、あまり深刻に考えていないといった方が妥当だと思われる。

男女別にみると、どの学年も「進学したい」は男子が多く、「進学したくない」は女子が多い。とくに中2・高1の女子は「進学したい」が25%前後と少ない。本県の49年の大学進学率をみると男子は24%、女子は18.4%で男子が多い。これらの要因について、高校側では次のように考えている人が多かったように思う。本県の親は女子は高校までよいという考えが強いこと。女

子は一般教養を身につけさせるよりは技術を覚えさせるために各種学校に進学させた方がよいと考えていること、及び家庭の経済的条件などである。

規模別ではどの校種間にも有意差がある。「進学したい」は大・中・小規模校の順序に、「進学したくない」は小・中・大規模校の順序になっている。大規模校の生徒は大学進学希望者が45%もいるが、小規模校は18%に過ぎず、大学進学を希望しない生徒は小規模校の51%に比し、大規模校は23%と少ない。都市から離れるに従って大学進学希望が減少しており、小規模校の多い農山村地区の生徒は希望していない生徒が多い。

学科別にみると、普通科（進学）が高1・高3とも90%以上とほとんど大部分の生徒が希望しているのは予想通りであるが、衛生看護科が高1で38%、高3で90%と多い。これは調査対象校には専攻科が設置されているためそこに進学したいと希望している生徒が多いからであろう。普通科（進学）、衛生看護科以外の学科でも高1では約15%～30%、高3では25%から40%の生徒が進学を希望している。

## 2 目標に対する取り組み方

中・高校生にとっての生きがい感は目標達成過程そのものの中にあり、結果や効果は二次的であるといわれている。確かに人間は将来に目的意識をもって努力している時は充実感があるといえよう。

ところで、中・高校生の学校生活における目的意識を考えた時、大きく二つに分類することができるのではなかろうか。その一つは進路意識である。よい学校に進学したい、よい会社に就職したい、などは中・高校生の共通した目的意識である。もう一つは、進路以外の目的意識、部活動で優勝したい、コンクールに賞入りたい、読書をしたいた等々の在学している間にぜひやりたいという成就意識である。

これらの目標に向かって努力を重ねることは、いろいろ問題はあってもハリのある充実した生活といえるのではなかろうか。もちろん目標はあってもその目標への取り組みがなされていない場合は充実感にはつながらない。目標に向かって努力することが充実感につながるのである。

そこで、この項では本県の中・高校生が目標に対しどのように取り組んでいるのかを明らかにしていきたい。

### 目標達成への取り組み方

表19-1 目標達成への取り組み方

| 区分   | (%)  |      |      |      |      |      |      |      |      |  |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|--|
|      | 中2   | 高1   | 高3   | 中2男  | 中2女  | 高1男  | 高1女  | 高3男  | 高3女  |  |
| 努力型  | 76.3 | 56.1 | 61.9 | 79.1 | 73.2 | 60.2 | 52.1 | 68.4 | 54.3 |  |
| 不努力型 | 23.7 | 43.9 | 38.1 | 20.9 | 26.8 | 39.8 | 47.9 | 31.6 | 45.7 |  |

表19は進路や在学中ぜひやりたいことに対してどのような取り組み方をしているかを調べた表であるが、この表から2点について考察を加えたい。

まず第一に、どの学年も「努力型」が「不努力型」よりも多いことが指摘できる。「努力型」は中2では76%、高1

は56%、高3は62%となっており、中2が最も多い。生徒の無気力等がよく問題になるが、中・高校生の半数以上が何らかの努力を重ねているのである。「不努力型」は中学生よりも高校生に多く、とくに高1が44%と目立っている。

第二に、男子は女子よりも「努力型」が多い。男子は「将来の生き方」でも「将来努力型」が、「期待する職業」では「個性や能力にあった職業」が多かったのであるが、女子と比べると自己実現を強く求めている、それに対する努力もしているといつてよいであろう。「努力型」に反応した男女の差は中2が6%、高1が8%、高3が14%で、学年が高くなるにつれて、この傾向が強くなるようである。

学科別にみると普通科（進学）が特徴的である。表19-2は、普通科（進学）の目標に対する取り組み方を示した表であるが、「努力型」が普通科（進学）以外の生徒と比べると極めて多い。

表19-2 普通科（進学）の目標への取り組み方 (%)

|      | 高1   | 高3   |
|------|------|------|
| 努力型  | 77.1 | 82.7 |
| 不努力型 | 22.9 | 17.3 |

平均と比較すると、高1では60%：77%、高3では62%：83%で、高1・高3とも約20%ほど普通科（進学）が多い。「将来の生き方」でも、普通科（進学）は「将来努力型」が他の学科に比して多かったが、学校生活において自分の目標をもちそれに対して努力を続けるということは極めて重要なことではなかろうか。

それでは、つぎに中・高校生の「目標への取り組み方」を進路と在学中に達成したいことに分けて考察してみよう。

### 進路に対する取り組み方

表20-1 進路決定の有無

| 区 分          | (%)  |      |      |
|--------------|------|------|------|
|              | 中2   | 高1   | 高3   |
| き め て い る    | 27.3 | 14.4 | 80.7 |
| 考えているがきめていない | 66.8 | 68.6 | 17.3 |
| 考 え て い な い  | 5.9  | 17.0 | 2.0  |

最初に進路決定の有無（表20-1）についてみると、

中2、高1は「考えているが、まだきめていない」が67%前後で最も多いが、高3は81%が「きめている」と答えている。高3という学年からすれば当然の数値といえよう。「考えていない」は高1の17%が目立っている。

ところで、中・高校生は進路に対しどのように取り組んでいるのであろうか。表20-2は進学や就職などに対する取り組み方を示す表である。これをみると、中2・高3

表20-2 進路に対する取り組み方

| 区 分  | (%)  |      |      |      |      |      |      |      |      |  |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|--|
|      | 中2   | 高1   | 高3   | 中2男  | 中2女  | 高1男  | 高1女  | 高3男  | 高3女  |  |
| 個人型  | 31.3 | 16.2 | 32.3 | 33.3 | 29.3 | 21.3 | 12.3 | 39.4 | 25.5 |  |
| 仲間型  | 16.7 | 9.2  | 17.5 | 15.0 | 18.3 | 8.1  | 10.1 | 15.6 | 19.3 |  |
| 不努力型 | 52.0 | 74.6 | 50.2 | 51.7 | 52.3 | 70.6 | 77.6 | 45.0 | 55.2 |  |

はほとんどかわりなく、「努力型」と「不努力型」がそれぞれ半数ずつとなっている。しかし、

高1は75%の生徒が「努力していない」と答え、「努力型」は25%に過ぎない。高1は進路の決定も中2、高3と比べて「考えていない」が多い。

これは調査時期が9月で高校入学半年足らずということもあり、進学や就職はまだ遠い将来のことと考えているた

めであろう。

男女間では高1と高3にちがいがみられる。「努力型」は男子が多く、女子は「不努力型」が多い。高1では7%、高3は10%のちがいがある。高校生の女子は男子に比べて進路に対する取り組みが比較的なされていないようである。

つぎに、進路を「きめている」生徒が81%いる高校3年について一つだけ問題点を指摘しておきたい。

表20-3 進路に対する取り組み方

| 区分   | -高校3年- (%) |           |        |        |        |        |          |
|------|------------|-----------|--------|--------|--------|--------|----------|
|      | 普通<br>(進)  | 普通<br>(就) | 農<br>業 | 工<br>業 | 商<br>業 | 家<br>庭 | 衛生<br>看護 |
| 努力型  | 78.2       | 46.1      | 31.0   | 51.3   | 48.1   | 44.3   | 45.0     |
| 不努力型 | 21.8       | 53.9      | 69.0   | 48.7   | 51.9   | 55.7   | 55.0     |

表20-3は高校3年の進路に対する取り組み

方を示す表であるが、これをみると、普通科(進学)に「努力型」が78%もいるが、農業科は

31%と少ない。やはり、農業科の生徒は進路そのものが不安定であるだけに、何に、どのように

努力してよいのかわからないというのが現状なのであろう。進路の決定も高校3年の81%が決定

しているにもかかわらず、農業科の3年は69%

と少ない。これに対し、普通科(進学)は大学受験というはっきりした目標がある。進路に対し明確な目標をもった生徒は努力をするし、目標が不明確な場合は努力のしようがない。困難なことではあるが、生徒に明確な目標をもたせることが大切であろう。

「個人型」と「仲間型」

目標に向って努力をする時、自分ひとりで目標に達成しようとする「個人型」と仲間と協力して努力していくとする「仲間型」に分けられるが、表20-2から進路に対する取り組み方を仲間性という側面からみてみたい。

進路に対する取り組み方はどの学年も「個人型」が「仲間型」よりも多い。受験や就職などは直接自己の将来にかかわる問題であり、しかもその内容は教科学習が中心になる。とくに受験勉強は「個人型」の色彩が強い。夜おそくまでひとりでコツコツと勉強するやり方は今も昔もかわりがない。進路に対する取り組みに「個人型」が多いのは当然であろう。これを男女別にみると男子は女子よりも「個人型」が多く、女子は「仲間型」が多い。男子はひとりで努力している生徒が多いが、女子は友だちと協力して目標を達成したいという傾向が男子に比べて比較的強いといえよう。

## 在学中やりたいことに対する取り組み方

表21-1 在学中ぜひやりたいことに対する取り組み方 (%)

| 区 分  | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 |
|------|--------|--------|--------|
| 個人型  | 21.3   | 21.6   | 16.9   |
| 仲間型  | 44.5   | 23.6   | 18.7   |
| 不努力型 | 34.2   | 54.8   | 64.4   |

在学中ぜひ成りたい目標をもち、それに対して努力を続けていることは学校生活をより一層豊かでハリのあるものにするであろう。それでは進路を除いて「在学中ぜひやりたいこと」に対する取り組み方をみてみよう。考察に入る前に、ここで問うているのは学校生活に対する期待や在学中にやりたいと思っていることなく、それらに対してどう取り組んでいるかということであることを、ことわっておきたい。

まず第一に「不努力型」の生徒が極めて多いことが指摘できる。「不努力型」の生徒は高3では64%と多いが、これは調査時期が9月なので在学中やりたいことは今までやってきたし、現在は進路に全力をあげているからであると思われるが、中2の34%、高1の55%は予想外の数値である。もちろん、健康な人間が健康であることへの努力を怠っているように、友だちに対して満足している生徒はとくに友情への努力はしないであろう。しかし、これらのことを考慮に入れても高1の55%は問題の数値といえよう。高1は進路に対する「不努力型」も75%と多いが、9割高校進学を迎えた今日、指導の難しさはもちろんであるが、例えば、部活動に積極的に参加させるとか、自由研究の時間を設定して課題意識をもたせるとか、何らかの対応策を講ずる必要があろう。

つぎに、「努力型」に反応した生徒を仲間性の側面からみてみると、「個人型」はどの学年もあまりかわりはないが、「仲間型」が学年が高くなるに従って減少しているのが注目される。「中・高校生の仲間性」の章でもみたように、学年が高くなるにつれてクラス員や部員の理解度や承認度が薄らいでいく傾向がある。在学中成就したい目標に対しても、そばに仲間が大勢いるにもかかわらず、高校生の場合は「個人型」と「仲間型」が相半ばしている。「三人寄れば文殊の知恵」ということばがあるが、ひとりではできないことも協力することによって可能になる。ひとりひとりが個人主義のわくを脱却して目標達成に連帯した時、高校生活はより充実したものになるのではなかろうか。

さいごに、高校1年における学科別についてみると、普通科(進学)と普通科(就職)・農業・商業・家庭の各学科との間に有意差がある。普通科(進学)は進路に対する取り組み方も他の学科に比して「努力型」の生徒が著しく多かったのであるが、進路以外の在学中成就すべき目標達成に対しても、「不努力型」が少ない、「不努力型」

表21-2 在学中ぜひやりたいことに対する取り組み方-高校1年-

| 区 分  | - (%)     |           |        |        |        |        |          |
|------|-----------|-----------|--------|--------|--------|--------|----------|
|      | 普通<br>(進) | 普通<br>(就) | 農<br>業 | 工<br>業 | 商<br>業 | 家<br>庭 | 衛生<br>看護 |
| 個人型  | 35.6      | 16.4      | 20.9   | 20.8   | 13.5   | 15.5   | 20.0     |
| 仲間型  | 26.6      | 18.8      | 33.1   | 33.3   | 23.3   | 22.7   | 30.0     |
| 不努力型 | 37.8      | 64.8      | 46.0   | 45.9   | 63.2   | 61.8   | 50.0     |

の数値をみると普通科(進学)は38%であるが、普通科(就職)・商業・家庭の学科は60%以上と多い。進路に対して努力をしている生徒は在学中ぜひやりたいことにも努力しているし、在学中成就したい目標に努力を怠っている生徒は進路に対する努力も怠っているといえそうである。

ここで一つ注目したいのは、「努力型」の生徒をみると、普通科(進学)の生徒に「個人型」が比較的多いということである。普通科(進学)以外の生徒はいずれも「仲間型」が「個人型」よりも多いが、普通科(進学)では「個人型」が多い。他の学科と比較した時「仲間型」はあまりかわらないが、「個人型」が目立って多い。つまり、普通科(進学)の生徒は、ひとりで努力している生徒が他の学科よりも多いといえるのではなかろうか。

## 努力の対象

それでは在学中どんなことをやりたいと考え、努力しているのだろうか。表22は「努力型」の生徒に「在学中やりたいことは何か」と問うた自由記述の結果をまとめたものであるが、この表から

つぎのことが指摘できよう。

一つは、「部活動」について努力していると反応した生徒が多く、とくに中2では63%と目立っている。部には共通の目標があり、部員はおたがいに助け合っていく同志である。中2の「在学中ぜひやりたいこと」に対する取り組み方をみても「努力型」が66%で、そのうち46%が「仲間型」であったが、きびしい練習の中で自己を練磨し、向上させようとする態度は望ましいものであるといえよう。

表2-2 努力の対象

| 区 分                | (%)  |      |      |
|--------------------|------|------|------|
|                    | 中2   | 高1   | 高3   |
| 部 活 動              | 62.7 | 37.0 | 18.3 |
| 旅行・登山              | 26   | 11.9 | 10.2 |
| 親友を得る              | 4.7  | 6.9  | 8.1  |
| 読 書                | 3.3  | 3.7  | 3.5  |
| 生徒会活動<br>社会奉仕      | 2.8  | 0.8  | 6.7  |
| 勉 強                | 8.5  | 7.3  | 7.3  |
| 学 校 生 活<br>を 楽 し む | 4.1  | 3.9  | 10.8 |
| 趣味・特技              | 6.1  | 14.8 | 16.3 |
| そ の 他              | 5.2  | 13.7 | 18.8 |

二つは、目標達成には同時に苦しみや困難を伴うものであるが、高校生はこうした苦しみや困難を忌避している風潮がみられる。

「旅行・登山」「趣味・特技」「学校生活を楽しむ」「読書」などを合計すると高1で34%、高3は41%となっている。これらはすべて「生活を楽しむこと」であり、同時に苦しみや困難はいやだというのである。しかし、このことから現代の高校生は現実享楽者であるときめつけるのは危険である。前述したように「将来のことなどわからないので、現在の生活を楽しく送った方がよい」という

「現実享楽型」はどの学年も10%台と少なく、「折衷型」が過半数を占めている。つまり、学校生活における義務はある程度果たし、生活を楽しむための努力をするというのが、生徒の生活態度の基本をなしているものと思われる。

「在学中ぜひやりたいこと」に対する「不努力型」が高1で55%、高3で64%と多かったのであるが、これらの生徒は、努力と

いうことを汗水流してがんばることとらえたので、「努力していない」に反応したものとも考えられるが、「努力型」に反応した高校生も汗水を流し努力することをあまり好んでいないようである。高校生は何か一つことに情熱を傾けて生きることを避け、苦痛や困難の伴わない生き方を希望しているといえそうである。

### Ⅲ 校内外生活におけるはりあい

#### 1 生活の中でのはりあい

一見、現代の中・高校生は豊かな生活の中で成長し、その生活の中にとっぷりと浸っているかのように見える。しかし、かれらは現在の生活を否定し、激しく充実した生活を望んでいるとも考えられる。ここでは、現在の生活をどのように感じ、どのような生き方を求めているのかを探ってみたい。

#### 現在の生活についての感じ

表2-3-1 自分の生活についての感じ

| 区 分 | %    |      |      |
|-----|------|------|------|
|     | 中2   | 高1   | 高3   |
| 充実型 | 15.6 | 7.3  | 6.3  |
| 模索型 | 61.2 | 52.7 | 54.1 |
| 単調型 | 16.6 | 30.8 | 26.5 |
| 不安型 | 6.6  | 9.2  | 13.1 |

中・高校生は自分の生活についてどのように感じているのだろうか。

表2-3は「自分の生活についてどのような感じをもっているか」に対する反応結果である。

この表から、まず第一に指摘できることは、どの学年も「何かやってみよう。しかしそれが何であるかわからない」という「模索型」が、中2で61%、高校生は約53%と多いということである。前項で、高校生は何か一つのことに情熱をかけて生きることを避け、苦痛や困難の伴わない生き方をしていると述べたが、実はそのような生き方を余儀なくされているといった方が適当かも知れない。半数以上の中・高校生は充実した生き方を送るために懸命に「生きがい」を求めているのである。しかし、それがなかなか求め得られないところに現代中・高校生のいらだちと不幸があるように思われる。生徒が日常の生活に逃避し、埋没していると責める前に激しく生きがいを求めていることを知るべきであろう。生きがいは誰かによって与えてもらうのではなく、自分で探し獲得するものであるが、生徒が「何かやってみよう。しかしそれが何であるかわからない」と訴えている以上、その「何か」がより高い価値のあるものを志向するような教師の指導と助言が望まれる。

第二に学年ごとにもみると、どの学年間にも有意差がある。「何をやっても気持ちにハリがある」という「充実型」はどの学年も少ないが、とくに、高校生は約7%と少ない。逆に、「毎日の生活が単調でおもしろくない」と退屈・倦怠などを訴える「単調型」の生徒は、中学生よりも高校生に多い。「不安でいらした時が多い」という「不安型」は学年が高くなるにつれて増加している。

表2-3-2 現在の生活について 規模別にみると、大規模校と中・小規模校の間に有意差がある。

| 区 分 | %    |      |      |
|-----|------|------|------|
|     | 大規模校 | 中規模校 | 小規模校 |
| 充実型 | 25.6 | 13.1 | 9.4  |
| 模索型 | 52.5 | 64.0 | 66.1 |
| 単調型 | 14.2 | 16.8 | 18.3 |
| 不安型 | 7.7  | 6.1  | 6.2  |

「充実型」は大規模校の26%に比して、中・小規模校はそれぞれ13%、9%と低く、「模索型」は逆に中・小規模校が多い。前述したように「将来に対する見通し」にも「希望型」は大・中・小規模校の順に27%、20%、16%となっており、「将来に対する生き方」でも「将来努力型」は中・小規模校に少なかったためであるが、農山村の姿貌は生徒の生活に対する感じ方にも何らかの影響を及ぼしているようである。

表23-3 現在の生活についての感じ

| 区 分 | —高校3年—    |           |        |        |        |        |          |
|-----|-----------|-----------|--------|--------|--------|--------|----------|
|     | 普通<br>(進) | 普通<br>(就) | 農<br>業 | 工<br>業 | 商<br>業 | 家<br>庭 | 衛生<br>看護 |
| 充実型 | 13.6      | 6.5       | 3.2    | 6.0    | 2.3    | 2.3    | 10.3     |
| 模索型 | 39.0      | 52.8      | 57.5   | 58.5   | 65.1   | 61.3   | 51.3     |
| 単調型 | 26.0      | 26.8      | 29.0   | 24.8   | 25.6   | 28.4   | 20.5     |
| 不安型 | 21.4      | 13.9      | 10.3   | 10.7   | 7.0    | 8.0    | 17.9     |

学科別についてみると、高1では普通科(進学)と普通(就職)・商業科、衛生看護科と普通(就職)・商業・家庭の各学科との間に、高3では普通科(進学)と普通(就職)・農業・工業・商業・家庭の各学科の間に有意差がある。高1、高3ともほぼ同じような傾向を示しているが、ここでは高3について考察をする。普通科(進学)は他の学科と比べると「充実型」「不安型」が多く、「模索型」が少ない。「充実型」はどの学科も少ないのであるが、普通科(進学)が他の学科より比較的多いのは、将来の目標を達成するには努力すべきであると考え、その目標達成の過程が充実感と結びついているためであろう。また「不安型」も衛生看護科ととも比較的多いが、これは受験を半年後にひかえている不安、焦燥からきているものと推察される。ちなみに、進学希望者は普通科(進学)は96%、衛生看護科は90%である。

### 共感を覚える生き方

中・高校生は自分の生活を充実させるために、けん命に「生きがい」を求めているが、それが何であるかわからず、いらだちを感じていることは前にのべた通りである。ところで、その「何か」

表24 共感を覚える友だちの生き方

| 区 分                  | %      |        |        |
|----------------------|--------|--------|--------|
|                      | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 |
| 勉強や部活動のいずれかにうちこんでいる人 | 11.5   | 8.6    | 9.4    |
| 勉強と部活動を両立させている人      | 38.9   | 21.3   | 15.2   |
| すきなこと熱中している人         | 39.0   | 59.1   | 61.4   |
| 適当に学校生活を楽しんでいる人      | 7.1    | 8.8    | 11.9   |
| 学級や生徒会活動でかつやくしている人   | 3.5    | 2.2    | 2.1    |

は高校生の場合、勉強や部活動以外で「熱中できるもの」であるらしい。表24は「共感を覚える友だちの生き方」を示す表であるが、高校生は「すきなこと熱中している人」が約60%となっている。「勉強や部活動のいずれかにうちこんでいる人」と「勉強や部活動を両立させている人」を合計すると中2では50%、高1は30%、高3は25%である。つまり、中学生は約半数が「勉強」や「部活動」を志向しているが、高校生は約6割が「すきなこと熱中している人」に共感を覚えている。「適当に学校生活を楽しんでいる人」に共感を覚えている生徒は比較的小さい。「すきなこと」の内容がはっきりしないので断定はできないが、中・高校生自身自分の「すきなこと」が何であるかわかっていない生徒がかなりいるのではなかろうか。学校生活を楽しむことでもないし、学級や生徒会活動で活躍することでもない。高校生の場合は勉強や部活動でもない。そのすきなことが何であるかわからない、あるいは、わかっていてもそれに熱中できないところに現代の中・高校生のいらだちがあり、不幸があるように思われる。

### はりあいを感じる時

それでは中・高校生はどんな時にはりあいを感じているのだろうか。表25は「あなたは自分の

生活の中でどんな時にはりあいを感じるか」に対する反応結果である。この表から三つ指摘したい。

表25 はりあいを感じる時

| 区 分                  | %      |        |        |             |             |             |             |             |
|----------------------|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|                      | 中<br>2 | 高<br>1 | 高<br>3 | 中<br>2<br>男 | 中<br>2<br>女 | 高<br>1<br>男 | 高<br>1<br>女 | 高<br>3<br>男 |
| 主に学校にいる時             | 34.0   | 23.8   | 19.5   | 29.3        | 38.5        | 18.5        | 27.9        | 15.6        |
| 主に学校外にいる時            | 16.2   | 23.3   | 25.2   | 19.5        | 12.9        | 30.3        | 17.8        | 31.6        |
| 学校にいる時と学校外にいる時と半々くらい | 44.7   | 38.9   | 34.3   | 45.5        | 44.2        | 35.6        | 41.6        | 34.0        |
| はりあいを感じる時はほとんどない     | 5.1    | 14.0   | 21.0   | 5.7         | 4.4         | 15.6        | 12.7        | 18.8        |

第一は、どの学年も「学校にいる時と学校外にいる時と半々くらい」が最も多く、中2は45%、高1・高3はそれぞれ39%、34%となっている。生徒の生活の場は学校内と

学校外にあるのでこれは当然であろう。つぎに、高1を境にして、中2は「学校にいる時」、高3は「学校外にいる時」とつづいている。

第二に、学年差に注目すると、どの学年間にも有意差がある。各学年のちがいの特徴的なものをあげるとつぎの通りである。

・学年が高くなるに従って増加するもの……「学校外にいる時」

「はりあいを感じる時はほとんどない」

・学年が高くなるに従って減少するもの……「学校にいる時」

「学校にいる時と学校外にいる時と半々くらい」

「学校にいる時」と「学校外にいる時」を比べると、高1がほとんど同じで、中2は「学校内にいる時」はりあいが多くと反応し、高3は「学校外にいる時」と答えている生徒が多い。つまり、学年が高くなるにつれて、生活のハリが学校内から学校外へ移行する傾向がみられる。中・高校生はいろいろな意味で子どもからおとなへの過渡的な状態におかれており、周辺人とも呼ばれているが、学校内から学校外に目を向け、そこではりあいを感じるようになるのは当然であろう。

「はりあいを感じることはほとんどない」と答えた生徒は、中2は5%と少ないが、学年が高くなるにつれて増加し、高3では21%となっている。学校内にも学校外にも生きがいを見出せず、現在の生活に空虚感を抱いている生徒が高校3年に5分の1もいるのは問題であろう。

第三は男女差であるが、どの学年間にも有意差がある。「学校にいる時と学校外にいる時と半々くらい」はほとんど同じであるが、「学校外」にはりあいを見出している生徒は男子が多く、女子は「学校内」が多い。とくに高校生にこの傾向が顕著である。

## 2 学校生活におけるはりあい

充実した学校生活をおくるために大切なこと

表26は「充実した学校生活をおくるために大切なことは何だと思うか」に対する反応結果であるが、3点について考察したい。

表 2 6 充実した学校生活をおくるため大切なこと

| 区 分          | 中    | 高    | 高    | 中    | 中    | 高    | 高    | 高    | 高    | 高校1年（学科） |      |      |      |      |      |      |
|--------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|----------|------|------|------|------|------|------|
|              |      |      |      | 2    | 2    | 1    | 1    | 3    | 3    | 普通       | 普通   | 農    | 工    | 商    | 家    | 衛    |
|              | 2    | 1    | 3    | 男    | 女    | 男    | 女    | 男    | 女    | (進)      | (就)  | 業    | 業    | 業    | 庭    | 生    |
| 授業がわかること     | 32.8 | 20.5 | 13.5 | 33.9 | 31.7 | 22.9 | 18.5 | 11.7 | 15.3 | 29.1     | 24.6 | 8.8  | 22.8 | 18.0 | 6.3  | 17.5 |
| 先生との交流       | 7.9  | 3.5  | 4.6  | 9.1  | 6.6  | 5.3  | 2.2  | 5.4  | 3.9  | 5.8      | 2.7  | 4.7  | 5.1  | 0.8  | 3.1  | 2.5  |
| 友だちとの交流      | 47.2 | 64.1 | 65.5 | 43.7 | 50.6 | 57.1 | 69.5 | 63.3 | 67.5 | 44.2     | 62.2 | 81.0 | 60.1 | 66.8 | 84.4 | 62.5 |
| 部活動の充実       | 4.0  | 3.6  | 5.0  | 5.7  | 2.3  | 4.3  | 3.1  | 6.3  | 3.7  | 4.1      | 2.4  | 2.7  | 2.5  | 8.3  | 3.1  | 7.5  |
| 学級・生徒会活動の活ばつ | 3.6  | 1.6  | 1.9  | 3.0  | 4.3  | 0.8  | 2.2  | 2.0  | 1.9  | 1.7      | 2.0  | 0.0  | 0.0  | 3.0  | 2.1  | 2.5  |
| 読書や趣味        | 3.3  | 4.3  | 5.7  | 3.0  | 3.7  | 6.3  | 2.8  | 6.8  | 4.6  | 8.1      | 4.6  | 1.4  | 7.0  | 0.8  | 1.0  | 5.0  |
| そ の 他        | 1.2  | 2.4  | 3.8  | 1.6  | 0.8  | 3.3  | 1.7  | 4.5  | 3.1  | 7.0      | 1.5  | 1.4  | 2.5  | 2.3  | 0.0  | 2.5  |

第一は、充実した学校生活をおくるために大切なことは、「友だちとの交流」と「授業がわかること」と答えている。「友だちとの交流」は中2で47%，高1・高3では約65%と多く、「授業がわかること」は中2・33%，高1・21%，高3・14%となっている。この2項目を合計すると、どの学年も80%前後になり、学校生活を充実させるのは、友だちと授業だと答えているのである。

第二は、自己実現をはかるよりも人間関係を深めることが、学校生活を充実したものにすると考えている。「友だちとの交流」「先生との交流」を合計すると中2では54%，高1は68%，高3は71%となる。これに対して、「授業がわかること」「部活動の充実」「学級・生徒会活動の活発」等の合計は中2で38%，高校生は20%前後となっている。つまり、生徒は学校生活を充実させるのに大切なことは、自己実現の可能性のある活動よりも、情緒的な人間関係であると考えている生徒が多いことが理解できよう。ただ、ここで注目したいのは部活動がどの学年も5%以下で極めて少ないということである。このことについては後述したい。

第三に、「友だちとの交流」は、学年別では中学生よりも高校生に、男女別では男子よりも女子に多い。「授業がわかること」は学年が高くなるに従って減少し、とくに農業科、家庭科が目立っている。

「友だちとの交流」を学年ごとにみると、中2は47%であるが、高校生は約64%で17%のひらきがある。男女別ではどの学年も女子が男子より多く、とくに高1はその差が12%と目立っている。学科別(高1)では家庭科、農業科が80%以上と多く、普通科(進学)は44%と比較的少ない。

「授業がわかること」は中2が33%で最も多く、学年が高くなるに従って減少し、高1で21%

高3では14%となっている。学科別にみると、高1の場合平均よりも高いのは普通科(進学)・29%普通科(就職)・25%，工業科・23%で、農業・家庭の両学科はそれぞれ9%・6%と少ない。

### 学校生活ではりあいを感じる時

それでは中・高校生は学校生活のどんな時にはりあいを感じているのだろうか。表27は「学校生活の中ではりあいを感じる時はどんな時か」に対する反応を示す表である。

表 2 7 学校生活ではりあいを感じる時

| 区 分               | 中    | 高    | 高    | 中    | 中    | 高    | 高    | 高    | 高    |
|-------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|                   | 2    | 1    | 3    | 2男   | 2女   | 1男   | 1女   | 3男   | 3女   |
| 好きな教科の勉強をしている時    | 20.5 | 15.4 | 15.8 | 26.3 | 14.8 | 19.4 | 12.3 | 16.8 | 14.9 |
| 友だちと一しょにいる時       | 33.7 | 36.9 | 35.0 | 25.3 | 42.0 | 26.0 | 45.3 | 27.1 | 42.5 |
| 部 活 動 を し て い る 時 | 34.4 | 24.6 | 20.0 | 35.7 | 33.0 | 26.4 | 23.2 | 23.6 | 16.6 |
| 学級や生徒会活動をしている時    | 2.0  | 0.9  | 4.1  | 2.2  | 1.7  | 1.4  | 0.6  | 4.1  | 4.1  |
| 登 下 校 の 時         | 3.5  | 4.6  | 3.9  | 3.6  | 3.5  | 6.3  | 3.2  | 5.7  | 2.2  |
| そ の 他             | 2.5  | 4.2  | 4.7  | 2.8  | 2.3  | 4.5  | 4.0  | 6.1  | 3.4  |
| はりあいを感じる時ほとんどない   | 3.4  | 13.4 | 16.5 | 4.2  | 2.7  | 16.0 | 11.4 | 16.6 | 16.3 |

|                                                                                             |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 目を見ると、「友だちと一緒にいる時」「部活動をしている時」                                                               |
| 「好きな教科の勉強をしている時」であり、これらを合わせると中2は89％、高1は77％、高3は71％となる。つまり、生徒の7割から9割までがこの三つに生きがいを感じていることがわかる。 |

まず、反応の多い項目をみると、「友だちと一緒にいる時」「部活動をしている時」

「好きな教科の勉強をしている時」であり、これらを合わせると中2は89%，高1は77%，高3は71%となる。つまり、生徒の7割から9割までがこの三つに生きがいを感じていることがわかる。

「友だち」「部活動」

「好きな教科」は現代中・高校生の三大生きがいの対象であるといっていよう。

つぎに、学校生活においては、勉強よりも部活動とか友だちとの交流といった教科以外にはりあいを感じている生徒が多い。「好きな教科の授業をうけている時」でさえどの学年も21%以下である。これに対し「友だちと一緒にいる時」はどの学年も35%前後であるし、「部活動をしている時」は中2では34%，高1は25%，高3は20%である。つまり、勉強以外のものを志向する生徒が増加しているといえるのではなかろうか。

ここで、問題点を提起しておきたい。それは教師側は勉強を中心としたものにはりあいを感じることを期待しているが、生徒は勉強以外のものに期待し強化しあっているということである。

9割高校進学を迎えた今日、これらのズレや対立は一層大きくなっていくと見なければならぬであろう。教師と生徒が共通目標のもとで教育が行われている時は問題ないが、ズレや対立が大きい時、教育の効果はあまり期待できない。これからの学校教育を考える上での極めて重要な問題だと思われる。

学校生活において「はりを感じる時はほとんどない」と充実感のなさを訴える生徒は、中2が3%，高1は13%，高3は17%と学年が高くなるにつれて増加している。これは生活の中で「はりあいを感じる時はほとんどない」生徒(表25)と対応する数値であり、学校生活で充実感のない生徒は日常の生活も空虚であるといえよう。

## 教科学習、部活動に対するはりあい

生徒は充実した学校生活をおくるために大切なことは「友だちとの交流」と「授業がわかること」であり、現在の学校生活ではりあいがあるのは「友だちとの交流」「部活動」「好きな教科の勉強」であると答えている。「友だちとの交流」については「仲間性」の項で詳述したので、ここでは授業と部活動、及びそのかわりについて考察してみたい。

表28 「教科学習」「部活動」「友だちとの交流」に対するハライ度

| 区 分       | 教科学習 |      |      | 好きな教科学習 |      |      | 部活動  |      |      | 友だちとの交流 |      |      |
|-----------|------|------|------|---------|------|------|------|------|------|---------|------|------|
|           | 中2   | 高1   | 高3   | 中2      | 高1   | 高3   | 中2   | 高1   | 高3   | 中2      | 高1   | 高3   |
| たいへんハリがある | 2.3  | 1.3  | 1.5  | 64.0    | 41.2 | 33.6 | 48.3 | 34.6 | 28.6 | 65.2    | 53.2 | 47.5 |
| すこしハリがある  | 71.6 | 44.6 | 28.4 | 34.2    | 53.3 | 58.9 | 37.9 | 42.6 | 40.7 | 31.2    | 40.1 | 45.5 |
| ほとんどハリがない | 26.1 | 54.1 | 70.1 | 1.8     | 5.5  | 7.5  | 13.8 | 32.8 | 30.7 | 3.6     | 6.4  | 8.0  |

最初に「教科学習」についてみると、「たいへんハリがある」と答えた生徒はどの学年も2%前後と少ない。「たいへんハリがある」「すこしハリがある」を加えると中2は74%になるが、高1は46%、高3では30%と少ない。教師はひとりひとりの生徒の学習の成立をめざして努力をしているが、「ほとんどハリがない」生徒が中2で26%、高1は56%、高3では70%もいるというのは淋しい限りである。

しかし、生徒は学習しているすべての教科に充実感がないわけではない。自分の好きな教科に対してはかなり充実感を抱いて学習しているといつてよい。「好きな教科学習」に対して「たいへんハリがある」生徒は中2で64%、高1は41%、高3は34%となっており、「すこしハリがある」を加えると、どの学年も95%前後となる。「ほとんどハリがない」と答えた生徒は中2で2%、高3でも8%に過ぎない。これは男女や学科にあまりかわりがない。

以上のことから生徒の授業に対する考え方をみると、「教科学習」全般に対しては、中学生は「すこしハリがある」、高校生は「ほとんどハリがない」と感じているが、「好きな教科学習」に対しては、中学生は「たいへんハリがある」高校生は「すこしハリがある」と感じているようである。自分の好きでない教科に対しては無気力な反面、好きな教科に対しては生きいきとした面を発揮しているといつてよいであろう。学校生活の中核が授業であることはいうまでもない。生徒ひとりひとりの能力、適性に応じたきめの細かな指導方法を確立することはもちろんであるが、高校生の場合はカリキュラム編成をする時もっと考慮を加える必要があるのではなかろうか。

つぎに部活動についてみてみよう。部活動に対しても充実感を感じている生徒が多い。「たいへんハリがある」「すこしハリがある」を加えると中2は86%、高1は77%、高3は69%となっている。生徒の学校生活における三大いきがいの対象はまさしく友だち、好きな教科、部活動といえるだろう。ただ、部活動に対するハライ度をみて気にかかることがある。それは、「部活動」に対するハライ度は、「友だちとの交流」「好きな教科」に比較するとかなり低いということである。とくに高校生にそれが目立っている。高校生の場合、「ほとんどハリがない」・「わからない」は「友だちとの交流」「好きな教科の学習」がいずれも10%以下なのに、「部活動」は30%以上であるし、「たいへんハリがある」と充実感を抱いている生徒も少ない。「部活動」は一般

の生徒にとって友だちという時やすきな勉強をしている時ほど充実感を感じていないのではなかろうか。これはあくまで、一般の生徒にとってであって、部活動で活躍している一部の生徒にとっては大きな生きがいであろう。部活動に充実感を強く感じている生徒と、充実感の薄い生徒とはっきり二分されているといった方が適当であるかも知れない。しかし、いずれにしても高校生には「授業」と同じように「部活動」も無意味で充実感がもてないとする生徒がでてきているといえそうである。

## Ⅳ 「仲間性」・「未来性」と学校・家庭生活

いままで、中・高校生の「仲間性」・「未来性」及び学校生活におけるはりあいについて考察を加えてきたが、ここでは「仲間性」「未来性」と学校生活における充実感・意欲的態度との関連を調べてみたい。なお、家庭はすべての生活の基盤をなすものであるものであわせて「家庭での安定感」との関連をも考察することにする。

### 「仲間性」・「未来性」のとりえ方

「仲間性」はいろいろの視点からとらえることができるが、ここでは「仲間からの承認度」(9~11ページ参照)に焦点をあて、「仲間」をクラス・部・友だちの3領域に限定した。つまり、クラス・部・友だちの三つの領域で「たいへん認められている」に反応した生徒を「クラス・部・友だちからともにたいへん認められている」、クラス・部・友だちの3領域で「すこし認められている」と答えた生徒を「クラス・部・友だちからともにすこし認められている」、3領域全部に「ほとんど認められていない」と反応した生徒を「クラス・部・友だちからともにほとんど認められていない」とし、三つのグループに分けて集計を行ったものである。

表29 クラス・部・友だちからの承認度

| 区 分                       | (%)  |      |      |
|---------------------------|------|------|------|
|                           | 中2   | 高1   | 高3   |
| クラス・部・友だちからともにたいへん認められている | 2.4  | 1.3  | 1.0  |
| クラス・部・友だちからともにすこし認められている  | 36.6 | 22.0 | 22.9 |
| クラス・部・友だちからともにほとんど認められない  | 3.5  | 5.3  | 4.8  |

〔注〕 数値は全調査人数に対する割合を示す

クラス・部・友だちの三つの領域における承認度を組合せ集計したのは、クラス・部・友だちといった三つの領域でもともに「たいへん認められている」と感じている生徒は、仲間内でも安定感が強いと思われる。クラス・部・友だちの三つの領域でもともに「ほとんど認められていない」と反応した生徒は、仲間から疎外感の強い生徒であろう。そこで、これらの生徒を抽出して、それらの学校生活における充実感・意欲的態度を調べることによって、承認度と学校生活における充実感・意欲的態度との関連が明確化されるのではないかと考えたからである。

表29をみてもわかるように、クラス・部・友だちからともに「たいへん認められている」生徒と「ほとんど認められてない」生徒は各学年ともかなり低い数値である。大部分の生徒は、クラス・部・友だちのいずれか一つからは、「たいへん認められている」か「すこし認められている」と反応しているが、ただ、クラス・部・友だちのすべての仲間から「ほとんど認められてない」と反応した疎外感の強い生徒が、低い数値とはいえ5%前後もいることは生徒指導上見逃せないであろう。

「未来性」は「目標達成の取り組み方」に限定した。目標達成への取り組み方への反応は18ページの表19-1に示す通りである。

### 学校生活における「充実感・意欲的態度」のとらえ方と「家庭での安定感」

学校生活における充実感や意欲的態度をとらえる視点はいろいろあるが、ここでは「学校生活の充実感」「学校生活で能力を発揮する場の有無」「部活動への参加」の三つに限定し、それに「家庭での安定感」を加えた。表30はその反応結果を示す表である。

表30をみると、「学校生活の充実感」は中2と高校生の間に有意差がみられ、高校生では「充実していない」と感じているものが約56%となっている

ただここでことわっておきたいのは、この数値は前にのべた「学校生活ではりあいを感じる時(表27)」の「学校生活ではりあいを感じる時はほとんどない」と反応した数値とかなりの違いがみられるということである。これは中・高校生は学校生活の各領域の一つ一つについては、はりあいをもっているものがかなりあるが、学校生活を全体としてとらえた時には充実感がないと感じているものが多いものと解釈出来よう。さらに、「学校生活ではりあいを感じる時」の調査が、学校生活での六つの領域をあげ、それらへのはりあいを調べたときの一つの選択肢であるのに対し、「学校生活の充実感」の調査は「充実している」「どちらともいえない」「充実していない」といった三つの選択肢より選ばせたという、調査方法の違いからでてきているものと考えられる。

表30 学校生活における充実感・意欲的態度

| 区 分                           |               | (%)  |      |      |
|-------------------------------|---------------|------|------|------|
|                               |               | 中 2  | 高 1  | 高 3  |
| 学校生活の<br>充 実 感                | 充実している        | 10.2 | 5.9  | 5.5  |
|                               | どちらともいえない     | 60.5 | 38.9 | 37.3 |
|                               | 充実していない       | 29.3 | 55.2 | 57.2 |
| 学校生活で<br>能力を発揮<br>する場の<br>有 無 | 自分の力を発揮する場がある | 43.6 | 25.6 | 22.6 |
|                               | どちらともいえない     | 47.6 | 52.9 | 47.4 |
|                               | 自分の力を発揮する場がない | 8.8  | 21.5 | 30.0 |
| 部活動の<br>参 加                   | 積極的に参加している    | 53.9 | 35.1 | 26.0 |
|                               | どちらともいえない     | 29.4 | 32.5 | 28.8 |
|                               | 積極的に参加してない    | 16.7 | 32.4 | 45.2 |
| 家庭での<br>安 定 感                 | おちついた気分になる    | 54.1 | 58.9 | 53.4 |
|                               | どちらともいえない     | 34.1 | 28.9 | 33.1 |
|                               | おちついた気分になれない  | 11.8 | 12.2 | 15.5 |

□は1%の有意水準で差異が認められるもの

「学校生活で能力を発揮

する場の有無」についてみ

るとどの学年間にも有意差

がある。「自分の力を発揮

する場がある」と思ってい

る生徒は、中2に最も多く

学年が進むにつれて減少し、

「自分の力を発揮する場が

ない」と思っている生徒は

逆に高3が最も多く、学年

が低くなるにつれて減少し

ている。

「部活動への参加」もど

の学年間にも有意差があり

「積極的に参加している」のは中2が54%で最も多く、学年が進むにつれて減少し高3では26%となっており、「積極的に参加してない」は逆の傾向を呈している。

「家庭での安定感」は各学年とも半数以上が「おちついた気分になる」と反応し、学年間の有意差はみられない。

### 「仲間性」・「未来性」と学校生活における「充実感・意欲的態度」・「家庭での安定感」との関連

それでは「仲間性」・「未来性」と学校生活における「充実感・意欲的態度」・「家庭での安定感」との関連を考察してみたい。

表31は「仲間性」・「未来性」と校内外生活の4項目との関連を示したものであり、それらの相関係数を求めて図式化したのが図1である。

表31 「仲間性」・「未来性」と「学校生活における充実感・意欲的態度」・「家庭での安定感」との関連

| 区 分                 |               | 仲 間 性       |      |      |            |      |      |             |      |      | 未 来 性 |      |      |         |      |      |
|---------------------|---------------|-------------|------|------|------------|------|------|-------------|------|------|-------|------|------|---------|------|------|
|                     |               | たいへん認められている |      |      | すこし認められている |      |      | ほとんど認められてない |      |      | 努 力 型 |      |      | 不 努 力 型 |      |      |
|                     |               | 中 2         | 高 1  | 高 3  | 中 2        | 高 1  | 高 3  | 中 2         | 高 1  | 高 3  | 中 2   | 高 1  | 高 3  | 中 2     | 高 1  | 高 3  |
| 学校生活の<br>充 実 感      | 充実している        | 15.8        | 55.6 | 16.7 | 10.9       | 7.7  | 3.5  | 9.7         | 1.8  | 4.0  | 13.1  | 7.7  | 12.3 | 6.2     | 4.1  | 2.3  |
|                     | どちらともいえない     | 57.9        | 22.2 | 33.3 | 62.7       | 47.0 | 46.5 | 38.7        | 29.1 | 34.0 | 54.8  | 41.0 | 53.6 | 48.8    | 35.7 | 30.0 |
|                     | 充実していない       | 26.3        | 22.2 | 50.0 | 26.4       | 45.3 | 50.0 | 51.6        | 69.1 | 62.0 | 32.1  | 51.3 | 34.1 | 45.0    | 60.2 | 67.7 |
| 能力場<br>発 揮<br>の 有 無 | 自分の力を発揮する場がある | 84.2        | 77.8 | 33.3 | 44.0       | 35.2 | 22.9 | 29.0        | 5.5  | 12.0 | 47.9  | 34.3 | 33.4 | 26.7    | 15.8 | 11.9 |
|                     | どちらともいえない     | 10.5        | 22.2 | 50.0 | 50.7       | 54.7 | 61.6 | 51.6        | 52.7 | 42.0 | 46.6  | 41.1 | 44.8 | 54.2    | 56.9 | 49.2 |
|                     | 自分の力を発揮する場がない | 5.3         | 0.0  | 16.7 | 5.3        | 10.1 | 15.5 | 19.4        | 41.8 | 46.0 | 5.5   | 24.6 | 21.8 | 19.2    | 27.3 | 40.9 |
| 部活動<br>参 加<br>の 加   | 積極的に参加している    | 84.2        | 88.9 | 33.3 | 60.8       | 47.8 | 32.2 | 22.6        | 23.6 | 12.0 | 60.0  | 42.3 | 28.2 | 40.2    | 25.5 | 19.1 |
|                     | どちらともいえない     | 10.5        | 11.1 | 50.0 | 31.3       | 37.7 | 40.3 | 64.5        | 32.7 | 40.0 | 27.2  | 26.4 | 29.4 | 32.6    | 36.8 | 29.3 |
|                     | 積極的に参加してない    | 5.3         | 0.0  | 16.7 | 7.9        | 14.6 | 27.5 | 12.9        | 43.6 | 48.0 | 12.8  | 31.3 | 42.4 | 27.2    | 37.7 | 51.6 |
| 家庭安<br>定 感          | おちついた気分になる    | 63.2        | 66.7 | 66.7 | 58.5       | 57.1 | 54.5 | 38.7        | 61.8 | 50.0 | 60.3  | 53.8 | 59.0 | 46.7    | 56.4 | 52.4 |
|                     | どちらともいえない     | 31.6        | 11.0 | 0.0  | 33.6       | 35.6 | 35.0 | 45.2        | 27.3 | 26.0 | 27.6  | 27.8 | 32.9 | 40.0    | 32.2 | 32.4 |
|                     | おちついた気分になれない  | 6.2         | 22.3 | 33.3 | 7.9        | 7.3  | 10.5 | 16.1        | 10.9 | 24.0 | 12.1  | 18.4 | 8.1  | 13.3    | 11.4 | 15.2 |

図1 「仲間性」・「未来性」と「学校生活における充実感・意欲的態度」・「家庭での安定感」の関連

| 区 分         | 仲 間 性 |     |     | 未 来 性 |     |     |
|-------------|-------|-----|-----|-------|-----|-----|
|             | 中 2   | 高 1 | 高 3 | 中 2   | 高 1 | 高 3 |
| 学校生活での充実感   | ×     | ○   | △   | △     | △   | ○   |
| 能力を発揮する場の有無 | ○     | ○   | △   | △     | △   | △   |
| 部活動への参加     | ○     | ○   | △   | △     | ×   | ×   |
| 家庭での安定感     | △     | △   | △   | ×     | ×   | ×   |

- 相関係数が0.8以上 (きわめて相関度が高い)  
 ○ " 0.6~0.8 (相関度が高い)  
 ○ " 0.4~0.6 (相関関係がある)  
 △ " 0.2~0.4 (相関関係はあるがその度合は低い)  
 × " 0.2以下 (相関関係がない)

この2つの図表からつぎの4点を指摘したい。

第一に「学校生活の充実感」は、高1では「仲間性」と、高3では「未来性」と高い相関関係があるということである。

「学校生活の充実感」との関連は学年によってかなり差異がみられる。中2では「仲間性」「未来性」ともにほとんど相関関係がみられず、高1・高3とは違う傾向を示している。学年によるこうした差異は、各学年の生徒が学校生活に何を最も期待しているのか、その期待するものの違いからくるものと思われる。「現在一ぱん心にかかっていることを一つだけ」自由記述させた結果が表32であるが、これで見ると、高3では「進路」が61%と最も多く、その他の項目に反応した生徒は少ない。高校生活最後の年で就職や進学を真剣に考え、それにとりくんでいる時期であるので当然であろう。高3は進路志向の学年といってもよいと思う。高1は表32で見ると「勉強」と「友人関係」が多いが、特に「友人関係」が中2・高3に比べて多いのが目立つ。それに対し「進路」は8%と低い。「学校生活ではあり

表32 現在気になること

| 区 分          | 中 2  | 高 1  | 高 3  |
|--------------|------|------|------|
| 進 路          | 26.3 | 8.3  | 60.6 |
| 勉 強          | 13.3 | 18.5 | 3.1  |
| 友 人 関 係      | 5.2  | 17.2 | 10.2 |
| 部 活 動        | 11.9 | 8.3  | 1.1  |
| 自 己 (性格・生き方) | 3.1  | 9.6  | 6.0  |
| そ の 他        | 4.4  | 5.1  | 3.3  |
| 何もない(無解答も含む) | 35.8 | 33.0 | 15.7 |

いを感じる時」(表27)でも「友だちと一緒にいる時」を第1位にあげている。新しい高校生活にスタートして間もない高1としては、親しく認めてくれる仲間を求める気持が強いといえよう。高3も「友だちとの交流」を強く望んでいるが、進路が優先するものと思われる。そこで高1は仲間志向の学年といってもよいのではなかろうか。したがって、高3

は進路に対する取り組み、目標を実現しようとする努力が学校生活の中心となっており、目標へ向っての努力の中に生まれる緊張感・成就感などが、学校生活の充実感の中核であると思われる。そこで「努力型」の生徒ほど「学校生活が充実している」と感じているのである。表31をみると「不努力型」の生徒で充実感を抱いているのは2%に過ぎず、「充実していない」と答えた生徒は68%と多い。

これに対し仲間志向の学年の高1は、親しく認めてくれる仲間を求める欲求が強く、認めてくれる仲間と一緒にいるといった安定感が学校生活の充実感となっていると考えられる。仲間から「たいへん認められている」ものほど「学校生活が充実している」と意識される。表31からわかるように、「たいへん認められている」に反応した生徒で、「学校生活が充実している」と答えた生徒は中2の16%、高3の17%に比べて、高1は56%と多い。

つぎに、中2について考察を加える。中2には「学校生活の充実感」と「仲間性」・「未来性」との間に相関関係がみられない。そこでこれらの要因について少し考えてみたい。28ページの表28で中・高校生の学校生活における「教科学習」「好きな教科学習」「部活動」「友だちとの交流」のハリアイ度について考察したが、これらと「学校生活の充実感」との相関関係を調べてみよう。中2の場合、「好きな教科学習」「部活動」「友だちとの交流」の三つの相関係数が0.4~0.6となっている。つまり「相関関係がある」といえる。したがって、中2では「好きな教科学習」「部活動」「友だちとの交流」にはりがあるものほど、学校生活に充実感をもっているといえる。つまり、この三つの具体的な日常活動が満されたものが、「学校生活が充実している」と感じているのであろう。そのため、「学校生活の充実感」と「仲間性」・「未来性」といった内面的なものとの間に相関関係としてあらわれなかったものと思われる。中2は高1や高3に比べて学校生活に期待するものが多く、とくに授業と部活動への期待が高校に比べて高い学年といえよう。

中・高校生で学校生活に充実感をもっているものは決して多いとはいえない。ことに学年が進むにつれて充実感を失っていくものが多くなっている。こうした生徒ひとりひとりの学校生活が充実したものになるような指導していくことが極めて大切である。そのためにはいままでみてきたように、お互に認めあい、協力しあう仲間をつくらせることによって学校生活に適応させ、さらにははっきりした目標をもたせ、目標達成に取り組むよう指導していく事がその基本であるといえよう。

第二は仲間性と「学校生活で能力を発揮する場の有無」は相関関係があり、とくに高1には「極めて高い相関関係」が、中2には「高い相関関係」がみられることである。

仲間性において「たいへん認められている」ものほど「学校生活で自分の力を発揮する場がある」と反応を示し、とくに高1では78%、中2では84%とながっているが、「自分の力を発揮する場がない」と答えているのは高1に1人もなく、中2に5%と極めて少ない。仲間から認められることは、仲間から理解され期待されていることである。こうした仲間との生活は、やすらぎ、おちつきがえられるとともに、仲間の中での自分の役割に気づき、自分自身の長所を知り、向上への意欲がおこり意欲的積極的な行動をよびおこすようになる。生徒が学校生活でいきいきと活動するのは、外部からの指示などによることもあろうが、仲間から認められ期待されていることが大きな要因となっているといえよう。とくに高1に極めて高い相関関係がみられるのは、前にも述べたように、高1は中2・高3に比べて親しい仲間を求め、仲間から認められることを強く期待している、仲間志向の学年であるからであろう。

学校生活で生徒をいきいきと活動させるためには、生徒相互が認めあい、心のかよった人間関係をつくるよう指導していくことが大切であるといえよう。

第三には「仲間性」と「部活動への参加」は相関関係があり、とくに学年が低いほど高い相関関係がみられる点である。

図1からもわかるように、中2は「相関度が高く」、高1は「相関関係があり」、高3は「相関関係はあるがその度合いは低い」関係となっている。数値をあげると、仲間から「たいへん認められている」と感じている生徒のうち部活動に積極的に参加しているのは、中2で84%、高1が89%であり、「ほとんど認められてない」で積極的に参加している生徒は中2・高1でそれぞれ23%に過ぎない。学年や学級の所属をはなれ、自主的に興味と関心を同じくするものによって結びついた部の集団は、友好的な人間関係が活動の基本といえよう。そこでは部員相互の承認・協力が欠くことのできない条件である。したがって仲間から「たいへん認められている」ものの部活動への参加に積極的になることは当然と考えられる。学年が進むにつれて仲間性との相関関係が低くなっていくのは、学年が進むにつれて部加入者が少しずつ減少して、低学年よりは限られたものだけになっていることもあろうが、学年が進むにつれて部活動への自信、使命感、責任感等が部活動への積極性をもたらす要因となっていると考えられる。

いずれにしても、部員が相互によく認め合い、協力し合い、啓発し合う人間関係をつくることで部活動を活性化させる上で大切なことであり、とくに中2や高1の部活動の指導上留意すべき点であるといえよう。

第四は「仲間性」・「未来性」と「家庭での安定感」との間には相関関係がない。

「家庭での安定感」は三つの学年とも「おちついた気分になる」と反応したものが半数以上をしめ、学年の間に有意差はみられない。昨年度の調査でも学校生活や社会生活に不満感の強い中・高校生も「家庭の雰囲気」の項目には高い満足感をもっている結果がでていることから、中・高校生の家庭への安定感が高いといえる。そして全体的に仲間から「たいへん認められている」生徒も「ほとんど認められてない」生徒も、また「努力型」の生徒も「不努力型」の生徒もともに「家庭への安定感」は高く、「仲間性」「未来性」との間に相関関係がみられない。ただ高1で、「努力型」の生徒よりも「不努力型」の生徒が安定感があると反応している点は注目されよう。学校生活に意欲的態度の乏しい生徒が家庭生活により安定感をもっているといった傾向を示しているのである。「家庭は外での強い緊張から人間を守る唯一の場として機能している」(千石保、速山教子共著「比較日本人論」小学館)といわれているのであろうと思われる。

いままで、「仲間性」・「未来性」と学校生活における充実感・意欲的態度及び「家庭での安定感」との関連を考察してきたが、「仲間性」・「未来性」と学校生活における充実感・意欲的態度との間には相関関係があることが明らかになった。仲間から認められている生徒ほど、学校生活で自己の能力を生かし、部活動にも積極的に取り組み、学校生活に充実感をもっている。また、目標をもち努力している生徒ほど学校生活に充実感をもっている、といえよう。

## ま と め

### 中・高校生の意識の共通性と連続性 ―― その平均的な姿 ――

現代は価値の多様化の時代であるといわれている。事実さまざまなタイプの中・高校生がおり、同じ一人の中・高校生の中にもさまざまな意識が複合して共在している。しかし、中・高校生の意識が多様化しているとはいえよりはむしろ共通した傾向があるのとらえた方がよいのではなかろうか。

まず、本県中・高校生の平均的な姿を今までみてきた「仲間性」と「未来性」の側面から浮きばりにしてみよう。

中・高校生の7割以上は友だちを「4人以上」もっており、友だちという時は大部分「楽しい気持」や「おちついた気持」になる。友だちという時は「いっしょに遊んでいた」、悩みや苦しみを打ちあけて共感しあい、あるいは「なんとなくすごしている」場合もある。クラスや部員の意識は「すこし理解しており」、自分の長所はクラス・部員・友だちからは「すこし認められる」と思っているが、友だちから「ほとんど認められていない」生徒は極めて少ない。

将来に対しては、中学2年・高校1年の段階では、まだ「あまり深く考えていない」が、進路決定を迫られている高校3年は「なにかなかならう」と思っている。期待する職業は「自分の個性や能力にあった」自己実現の可能性のある職業を半数以上の生徒が望んでいる。将来の生き方としては、「将来の目標に向かって努力はするが、現在の生活も楽しみたい」という「折衷型」が6割以上である。目標に対する取り組み方をみると、生徒の「努力」の抱え方に疑問は残るが「努力している」と思っている生徒は、最も低い高1でも56%と過半数を占め、中2は8割近く、高3は6割以上である。自分の現在の生活に対しては、「何かやってみたい、しかしそれが何であるかわからない」と訴え、「好きなことに熱中している友だち」に共感を抱いている。

学校生活ではりあいを感じる時は、「友だちという時」「部活動をしている時」「好きな勉強をしている時」と答え、学校生活を充実させるのは「友だち」と「授業」だといっている。

以上が平均的な本県中・高校生の姿である。現代つ子らしい側面もあり、少しく頼りなさは感ずるが意識としては健全であるといつてよいであろう。つまり、大部分の生徒には共通した傾向がみられる。しかもこれらの意識は恐らく中・高校生を含む現代青年にも、おとなの中にも見出すことができるのではなかろうか。中・高校生の不安は現代青年の不安であり、おとなの不安であろう。中・高校生の生き方に対する考え方は、おとなの生き方の考え方もあろう。断絶ととらえるよりは連続ととらえる方が多様性ととらえるよりは共通性ととらえた方がより生産的であるように思われる。

### 感 覚 の 変 化

つきに中・高校生の意識を「変化」という側面からとらえてみたい。社会の変化はおとなの考え方にも、子どもの考え方にも影響を及ぼすのは当然であろう。その社会の変化の中でとくに中・高校生と大きななかかわりがあるのは高校進学率9割であると思われる。高校進学率約92%の現状では確にかつての高校生の意識とは異っているであろうし、その影響は中学生にも及ぼしていよう。この調査でもと

くに高校生にある感覚の変化といったものが感じられる。

第一は、「勉強」とか「部活動」といった困難や苦勞の伴うことを忌避し、「楽しさ」を求める傾向があるということである。これは高校生にだけにみられる特異な現象でなく、現代の青年にも、あるいはおとなにも見られることである。昭和46年に総理府青少年対策本部より発表された「青少年の連帯感などに関する調査」をみると、「生きがいを感じる時」は「スポーツや趣味に打ち込んでいる時」(43.5%)が最も多く、「友人や仲間といる時」(38.8%)とつづいている。今回の調査でも、学校生活において自分のぜひやりたいと思うことに対して(進路に対するとり組みを除く)努力している生徒は高1が45%、高3が36%と少ない。しかも、「努力している」と反応した生徒の努力の対象でさえ「旅行・登山」「趣味・特技」「学校生活を楽しむ」「読書」等の「楽しみ」を中心とするものと「部活動」「勉強」などが半数ずつとなっている。共感を覚える友だちの生き方をみると、勉強や部活動にうち込み、あるいは両立させている友だちの生き方よりも、「好きなことに熱中している友だち」に共感を覚えている。

ここに生徒の文化とおとなの文化のズレや対立がある。おとなはとくに教師は勉学や部活動にはりあいを感ずることを期待しているが、生徒は勉学以外のものに期待し強化しあっているということである。9割高校進学時代を迎えた今日、これらのズレや対立は一層大きくなっていくであろう。生徒の考えていることと教師の考えていることのどこに接点を求めるかは、これからの生徒指導を考えていく上にとって極めて大切なことではなかろうか。

第二に、現代の中・高校生は表面的には将来に対する意識が薄く、現在の生活に埋没しているように見えるが、反面自我の確立を求めて痛切に生きがいを求めているといえよう。

「将来の生き方」をみると、「将来の目標を達成するためある程度自分の楽しみをおさえて努力すべきだ」という「将来努力型」は比較的少ない。中・高校生は未来の可能性に生きる年代であり、将来の目標のためには現在の楽しみは少くらい犠牲にしても努力を続けるべきだと思うが、そのように考えている生徒は1割前後に過ぎない。大部分が「将来の目標に向かって努力をするが、現在の生活も楽しみたい」という「折衷型」なのである。

さらに、「将来に対する見通し」をみても、中学2年、高校1年は「将来についてあまり深く考えていない」が最も多く、「なんとかなるだろう」という「楽観型」を加えると、6割近い数値になっている。進路決定期がまだ遠い先のことでと思われるが、進路を目の前にした高校3年でも「楽観型」は4割以上である。中・高校生期はまだ未来予測が不十分とはいえ、ある程度の認知は可能な年代である。それが中2・高1では「将来についてはあまり考えず」、いざ、進路の選択を迫られた時に「何とかなるだろう」と考えている生徒が多いということは進路指導の上からも一つの問題点であろう。

中・高校生意識の中には、かつての「中・高校らしさ」は失われており、何か一つのことに関心を傾けて困難や苦勞をのりこえて、ひたむきに生きることを避けているようなふしが見られる。このことは中・高校生の理想性にも現われている。尊敬する人物は「いない」か身近な人に限られている。中・高校生の理想は日常生活の中に埋没してしまったのであろうか。

しかし考えてみると、理想とは社会の中から学びとっていくものであるが、その学びとる社会が動揺し、変ぼうを続けているためになかなか求め得られないのが現状なのである。中・高校生は自分たちが

快適な日常生活に埋没することを恐れ、激しく理想を追求し、開かれた生きがいを求めているのである。そして、それがなかなか求め得られないところに現代の中・高校生の不幸がある。中・高校生は決して現在の快適な生活に充実感を抱いているのではない。5割以上の生徒が、「何かやってみたい。しかしそれが何であるかわからない」と充実ある生活を模索し、高校生の4割が「毎日の生活が単調でハリがない」「不安でいらしている」と生活の単調さ、空虚さを訴え、不安や焦燥感にかられているのである。

### 学校生活におけるはりあい

まず、最初に「学校生活の充実感」と「仲間性」・「未来性」の関連を調べてみると、中学生に相關関係はなく、高1は「仲間性」と「きわめて相關度が高く」、高3は「未来性」と「相關度」が高いということである。これは、中学2年では、自我が確立されていないため、学校生活のどこまでも充実感があるということであろう。つまり「仲間から承認されていること」「目標達成に努力をしていること」などの内面的なことよりも、より具体的な日常活動そのものが、はりあいになっているのであろう。

これに対し、高校生になると焦点化されてくる。高校1年の場合は、クラス・部員・友だちの仲間から承認されていることが、学校生活の充実感に極めて高い相關度があり、高校3年では、目標達成への努力過程が高い相關度にある。このあたりに高校生の学業指導のポイントがあるように思われる。

第二に中・高校生の共通性に目を向けた時、学校生活における三大いきがいは、どの学年も「友だちといる時」「部活動をしている時」「好きな教科を学習している時」となっている。このことについて少しのべたい。

まず一つは、中・高校生は友だちとの交流を激しく求めているし、はりあいを感じている。とするならば、学校でも積極的意図的に友だちとのふれあいはかる場を提供すべきであろう。休み時間とか放課後等に親しく話しあえる態の場とか、緑の環境づくりなども一方法であろう。さらに、本県は緑とオゾンに恵まれている。美しい大自然のもとでの合宿訓練、社会施設を利用した共同生活などは、日ごろ孤独感に悩んでいる中・高校生にとって、またとない接触の場であるし、青春時代の忘れ得ぬ思い出ともなろう。

二つは、部活動に興味を失ってきている生徒も出はじめているようであるが、部活動を充実・強化することは学校生活をさらに生きいきとしたものにしよう。部活動や学校祭、修学旅行などにおいては中・高校生本来のエネルギーな側面が発揮される。授業をある程度削減してもそれらの活動を活発化したいものである。それと平行して同時に、学級(ホームルーム)活動・生徒会活動の充実も望まれる。「学校の人間化」という観点からもこれらの充実が目下の急務であるといえよう。

三つは、学校生活の充実を図るには授業を魅力あるものにすることが肝要である。生徒の現在の生きがいは「好きな授業」にあり、学校生活を充実させるために大切なことは「授業がわかること」と答えている。昨年度の調査では「教育内容」や「指導方法」に対する不満がかなり多く(山形教育164)その不満の具体的内容を見ると、「習う量が多く、なかがむずかしいこと」(以下中2・高1・高3の順 54%、38%、24%)「社会にでてから役に立つと思うなかが少ないこと」(19%、25%

34%)、「興味や関心のないなかが多いこと」(24%, 31%, 35%)となっている。「指導方法」では「先生だけの一方的な説明に終わっていること」(37%, 41%, 44%)、「授業がわかりにくいこと」(36%, 38%, 27%)に集中している。

教師はひとりひとりの生徒の学習の成立を目指して努力している。しかし、授業のなかに興味と関心がなく、しかも理解できない内容が多い。指導方法が一方通行の講義式では9割進学の今日、授業に対する魅力が薄れていくのは当然であろう。ひとりひとりの生徒の能力・適性を育てるための個別指導や教育機器を用いた授業などをもっと取り入れる必要があろう。

同時に、高校の場合は教育課程の編成にも十分考慮を加えることが大切である。高等学校学習指導要領の「指導計画作成等に当たって配慮すべき事項」の中に、「個々の生徒の能力・適性等の的確な把握に努め、その伸長を図り、生徒に適切な各教科・科目や類型を選択させるよう指導する」(傍点筆者)とあるが、教育課程の編成やその選択時にはとくに配慮すべきであろう。学校生活の充実感とも大きなかかわりがあると考えられるからである。

以上、本県の中・高校生の生きがいの傾向についてみてきたが、中・高校生は「仲間とともにいることの心地よさ」は感じているが、「未来を切り開いていく喜び、幸せ」といったものを感じとれない生徒も少なくないのではなかろうか。しかし、中・高校生自身開かれた真の生きがいを求めて努力をしているし、それに期待したいと思う。

### 参 考 文 献

- |           |                                          |           |
|-----------|------------------------------------------|-----------|
| 神 谷 美恵子著  | 生きがいについて                                 | みすず書房     |
| 宮 城 音 弥著  | 日本人の生きがい                                 | 朝日新聞社     |
| 藤 原 喜 悦編  | 現代青年の意識と行動                               | 大日本図書株式会社 |
|           | 3 生きがいの創造                                |           |
| 見 田 宗 介著  | 現代の生きがい                                  | 日本経済新聞社   |
| 島 崎 敏 樹著  | 生きるとは何か                                  | 岩波書店      |
| 千 田 保 子共著 | 比較日本人論                                   | 小学館       |
| 遠 山 敦 子   |                                          |           |
| 藤 原 喜 悦編  | 現代青年の生きがい                                | 金子書房      |
|           | (現代青年心理学講座 7)                            |           |
| 中野目 直 明著  | 現代の高校生                                   | 日本放送出版協会  |
| 津 留 宏編    | 青年心理学                                    | 有斐閣       |
| 松 原 治 郎著  | 日本青年の意識構造                                | 弘文堂       |
| 山形県教育研究所  | 中・高校生の社会認識に関する研究                         |           |
| ”         | 学校生活と子どもの意識(「山形教育」No.164)                |           |
| 香川県教育センター | 昭和47年度研究紀要「児童・生徒に希望と生きがいを抱かせるにはどうすればよいか」 |           |